

15
2
40

(M)

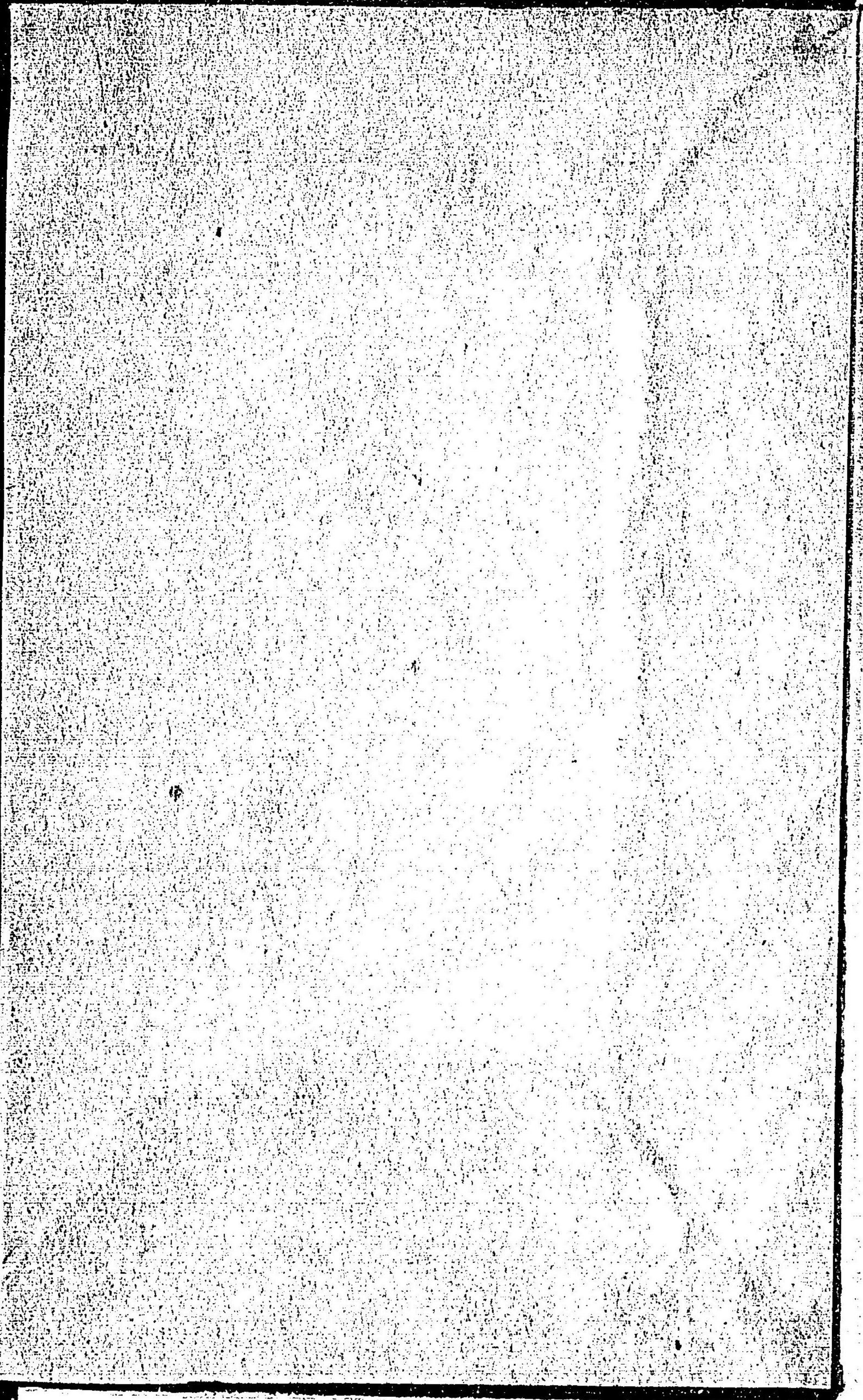
印度藏志略

止二



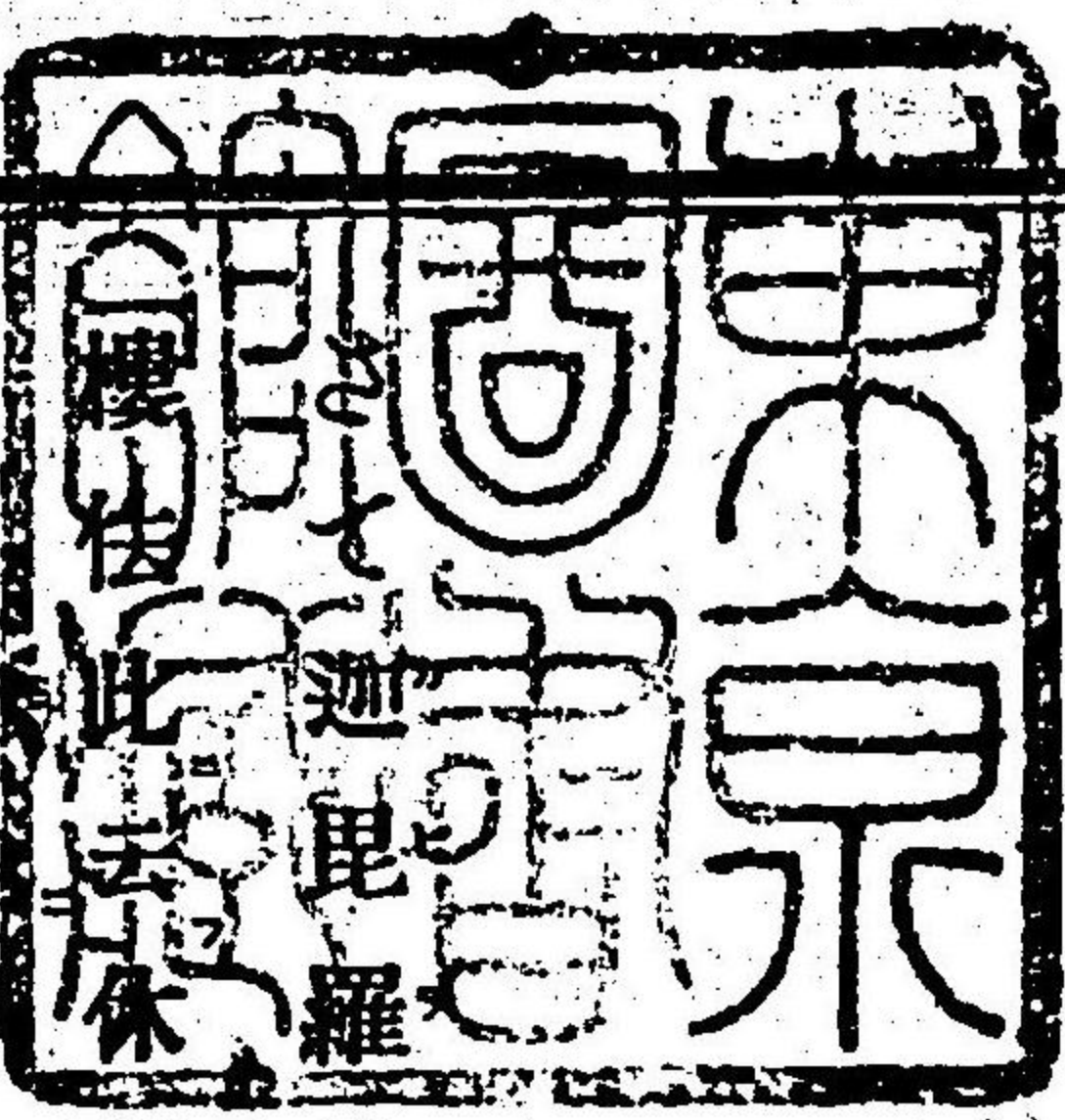
東泉園齋				
	四	一		
	〇	二	五	
冊	号	架	函	類

東泉園齋



印度藏志略二之卷

No 11668



大壑 平田篤胤 撰

門人 矢野玄道 節略

孫 平田胤雄

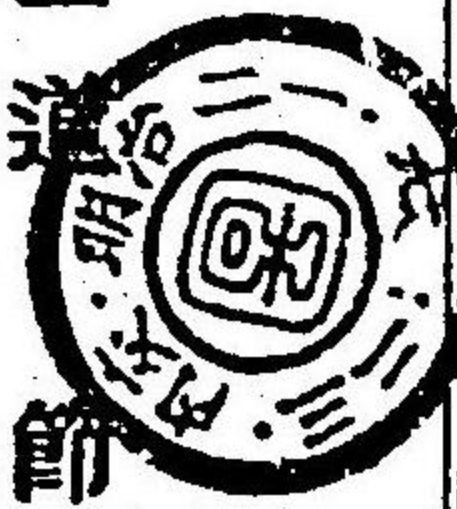
門人 井上頼國 同校

曾孫 平田盛胤

仙が次に出てたるを。優樓佉仙といふ。輔行記に。優樓佉此云休留仙。其人晝藏山谷。以造經書。夜則游行說法教化。猶如彼鳥。故得此名。亦名眼足。其人在佛前八百年。出世亦得五通。說論十萬偈。名衛世師。と云ひ。因明論疏に。成劫之末。有外道名。嗚路。迎。

舊云。優樓迎。訛也。

此云。鵠鷗。身形醜陋。晝則隱伏山林。夜則來人間乞食。因驚他。產婦。



令墜胎。便不乞食。乃於碓碾搗春場糠中。拾取碎米而食之。因此亦號蹇拏僕。

舊云蹇拏陀訛也。

此云食米齊仙人。造論名吠世師迦奢薩怛羅。

舊云衛世師。

此云勝論造六句論。諸論中勝故。或勝前數論故名。六句論一實句義。梵云陀羅標。此云主諦。九法爲體。

謂地水火風空時方我意。與二十四德爲所依。

二德句義。梵云求那。此云依諦。

謂色味香觸數量。一異合離彼此覺苦樂欲瞋勤勇重輕潤行作聲。

三業句義。梵云羯磨。此云作諦。

謂取捨屈伸行

四大有句義。梵云三摩若。此云總相諦。

即前實德業不能自有。由別有一大有有之。十句論名同。俱舍名總同句義。

五同異性句義。梵云毘尸沙諦。此云別相諦。

別離實德業。外有別自性。人與人同。由別有同法令同。人與畜異。別有異法令異。

六和合句義。梵云三摩夜諦。此云無障礙諦。能令實等不相離成。要得一人傳受。須具七德。とあるは。謂ゆる勝論外道の六諦なり。然して復言く。後劫滅時。波羅底斯國有婆羅門名摩納婆伽。

此云儒童。

有子名般遮尸棄。

此云五頂。

七德雖具。根熟稍遲。爲染妻妃。卒難化導。後因遊戲。與妻競花。厭却念。仙人。仙人應時而至。迎至住處。爲說六句論。後末代十八部中上首名戰達末底。

此云惠月。

造十句論。開同異句。爲二。更加有能。無能。無說。三句也。とある。是ぞ優樓佉仙が立たる。法行の大概なる。然して六諦は。迦毘羅仙が二十五諦を。取捨して作れり。と見ゆる中に。乞食すること。妻妃に染まらずと云ふこと。甚き苦行などは。此仙が新意と聞ゆたり。斯て此仙人晝は山を出でず。夜のみ出しは。實は其形の醜陋を。恥ぢたりし故と聞ゆ。亦名を眼足と云ひしは。頭に眼なく。足に眼の有りけるにや。

なほ委しく注はれたり

○ろが次に出でたる外道を。勸沙婆仙と云ふ。百論に。勸娑婆が弟子。誦尼乾子經。言五熱炙身。拔髮等。受苦法。是名善法。とある所の疏に。勸娑婆者。此云。苦行仙。其人計身有苦樂二分。若現世併受若盡而樂法自出。所說之經。名尼健子。有十萬偈。尼健子此云。無結。依經修行。離煩惱結。故以爲名。亦名那耶修摩。舊云。尼健子。經說有十六諦。聞慧生。八。一天文地理。二算數。三醫方。四呪術。及四韋陀。故云。八也。次修慧生。八。修六天行。爲六。及事星宿天行。爲七。修長仙行。爲八。修長仙法意。欲捨無常。苦故。求常樂。即第十諦六也。

此にも委しく説かれたれば。全書をみるべし。

と言ひ。また方便心論を引ききて。有五智六部四濁。以爲經宗。五智者。謂聞智。思智。自覺智。慧智。義智。六部者。一不見部。二苦受部。三愚

智部。四命盡部。五不好得姓部。六惡名部。四濁者。一瞋。二慢。三貪。四
詔也。而明因中亦有果。亦無果。亦一亦異。以爲經宗。とも言ひ。また
婆沙論を引きて。僧法經計十一根。衛世師經計五根。尼乾子經計
内外物有命根故。不斷生草。不飲冷水。とも。僧法偏明覺諦。世師偏
引。依諦。尼乾修長仙法。此三師竝是釋迦未興時盛行。天竺とも見
ゆなり。

三師とは。迦毘羅。優樓伽。勒沙婆の三仙を云ひ。葦紐天。大自在
天に此三仙を合せて二天三師といふこと。又世尊とは。大梵
天王を稱へる號なるを三仙が僭稱したるを佛祖も學びて
我稱とするなど。此世には天皇を除き奉りて世尊と稱すべ
き由なき事をも論はれたり。

さて十八部外道。と云ふ事あり。其は百論疏に。釋迦出時。值十八

智人。羅什云。三種六師。合十八部。大同小異。皆以苦行爲本。初六誦
四韋陀。中六自稱一切智。即是六師。後六得五神通。詳比意。十八人。
皇法師云。初六從聞慧生。阿蘭迦蘭等也。中六從思慧生。若提子等
也。後六從修慧生。須跋陀等也。此皆勒沙婆部中。枝流出也。とあり。
聞慧。思慧。修慧。とも。勒沙婆仙が立法なるに。其より生ずと
云へは。各々其一慧を執して。また別に一機軸を出せるなり。
然れば此皆。勒沙婆部中より流れ出でたりと云ふこと。實然
る言なり。

初六なる阿蘭迦蘭と云ふは。謂ゆる阿羅々仙人なり。大涅槃經
音義に。阿羅々。此云。懈怠。獲通定者也。また陀羅々仙。有作。阿羅邏。
古音云。無醫仙也。とも見ゆ。

十輪經音義に。阿羅茶。唐言。自誕。舊經。阿蘭迦蘭是也。とも。大般

若經音義には。阿羅茶迦羅摩子梵語。外道仙人名也。此無正翻。とも云へり。名聲集に。阿羅々迦摩羅。亦名羅勒迦藍。とのみ有りて。翻ばなし。

また此部に。醉陀羅仙人と云ふがあり。其も大涅槃經音義に。醉頭藍弗。比云。獺戲子。坐得非想定。獲五神通。飛入王宮。遂失通定。途步歸山。とも。醉陀伽古音云。勝也。亦名盛也。とも有り。

十輪經音義に。嗚達洛迦。唐言。雄傑。即經中。醉藍弗是也と云。經律異相音義には。優踰藍梵語。外道名也。或名醉頭藍。と見ゆ。名義集には。醉陀羅々摩子。亦云醉頭藍弗。此云。猛喜。又云。極喜。とあり。名義集なるは。上も此も。共に中阿含經に依れるなり。

此二仙人は。共に佛祖の師なり。其は百論疏に。佛未成道時。就此二人受學。涅槃經云。從阿羅々學。無想定。從鬱頭蘭弗學。非想定。此

二人既。是佛師。と云へるが如し。

西域記摩揭陀國の下に。云々佛祖が懸記は。信するに足ず。されど仙人の女色に依りて。其通を失へる類は。獨角仙人など云ふを始め。印度に彼死あるは。遂けがたき女色を禁ずる事を。專旨として。其道を立つればなり。本朝にも。久米仙と云へるが。女色を思ひて。通を失へりと云ふも。印度の仙法に依りたればなり。西戎國の古仙道は。然らず。是ぞ我が古道に叶へる。眞の仙道なる。其は別に記せる物あり。

中六なる若提子と云ふは。謂ゆる六師外道の一人なり。此も百論疏に。六師者。一富蘭那。其人計斷。謂無君臣父子因果之義。二俱舍利子。其人計一切法自然爲宗。三毘羅尼子。其人計道不須修經。八万劫。自然而得。如轉縷丸於高山。縷盡則止。四欽婆羅。其人計身

有_レ苦樂二分。現受_レ苦盡。樂法自出。五迦羅鳩駄。其人計_レ亦有亦無。應_レ物起見。他問有耶。答云有。他問無耶。答云無。六若提子。其人計_レ業決定得報。今雖修道不能中斷也。とあり。

なほ委しく説かれたり。

かくて輔行記に。六師元祖是迦毘羅。支流分異。遂爲六宗。とあるは。上に引く百論疏なる。皇法師が説に。中六從思慧生と有れど。勅沙婆仙が立法に從のみならず。迦毘羅仙が立法にも從れる。と知られたり。

思慧とは。勅沙婆が立てたる五智の一なる事。後六なる須跋陀は佛祖が死期に來て弟子と爲れるが事なるべし。とも説かれたり。

さて迦毘羅仙が。自性の新説を立てたるより。次々に。優樓佉。勅

沙婆。六師の徒など。己が向々。彼に勝たむ。此に優らむ。と競ひ起りて説法せる。其差別は。上に往々辨へたる如くなるが中に。大なる事を論むれば。天説にぞ有ける。其は迦毘羅は。新説を立てたる始なれど。仍梵天の古説を存し。往々其徳をも述べ。また我と法と相應すれば。梵天また忉利天に生ずと云へるも。上に本文を引きて辨ふる如く。梵志の古説に據れること灼然く。優樓佉が天説は如何。と云ふこと詳ならねど。古説に背ける説は。無りきと聞けたり。斯て諸天の異説を起し始めたるは。勅沙婆仙にぞ有ける。そは上に引く。此仙が立法の文に。修慧とて。六天の行を修す。と云ふ事の有るにて知るべし。抑六天とは。謂ゆる欲界

四王天。忉利天。燄摩天。兜率天。化自在天。他化自在天。

の六天なり。然して此後に出でたる。六師外道の第一に居る。富蘭那と云ひし者。うの欲界の説を破りて。色界の諸禪天を立てたるが。

大梵天を初禪とし。光音天を第二禪とし。徧淨天を第三禪とし。色究竟天を第四禪とし。此を四禪天といふ。

なほ飽かずまに。己が立てたる。色界四禪の説をも破りて。無色界の空處識處など云。天を立てたり。其は名義集に。事鈔と云ふ物を引きて。色空外道。以用色破。欲有。以空破。色有。謂空至極。と有にて知るべし。

偕ころ色空外道と統べたるなれ。

然るに此が同時に出でたる。阿羅々仙と云ひし者。また其上を一層して。無所有所天。と云ふを妄想し此仙が同時に。鬱陀羅仙

と云ひし者。なほ加上して。非想非々想處天と云ふを妄計したる是ぞ謂ゆる。二十八天の究竟なる。かくて最後に。佛祖起りて。其をみな網羅して襲ひ取り。悉く元より。常在せる諸天と爲て。大千世界の妄説を。大成せるにぞ有ける。さて天説は更なり。佛祖が一代の説法の。骨とある事とも。悉く梵志の古説。また諸外道の立法の。己が意に應へるを。竊せる説あること。明白なるに。其を心宜からす思へる。末流者の所爲として。大涅槃經を偽作せる中に。佛告。迦葉。所有種々異論。呪術言語文字。皆是佛説。非外道説。云々と説けり。と作れるは。笑ふに堪へたる語ぞかし。

百論疏に。一切九十六術。經書記論。既是邪説。稱爲有上。佛法正説。名爲無上。とも見ゆなり。

其は此語の如くは。佛祖が生涯は更なり。後世次々に出でたる

論師ども。馬鳴。龍猛。提婆。無著。世親を始り。論説とし言へば。種々の異論を破らむと。勞き喧けるは如何ぞや。

さる種々の異論を弘め置きて。また其を止むと勞き喧ぐは。譬へは痴者の。わざと家ごとくに火を放ちて。其火を救はむと。狼狽するに異ならず。此はろも何ちふ狂事ぞも。然れば此。涅槃經なる説は。盗人他の財寶を竊み取りて。元より我が物がはに持なし。彼家になほ餘りの財寶も残れるを。人に示して。彼家なる財寶ころ。我が物なれと猛び誓るが如し。いと可笑くころ。かゝる類の痴説をも。護法者流は。涅槃の無益説よ。法身の金剛説よと。猶喧ぐめれど。勞々拘ること勿れ

さて其提婆論師が百論は。殊に異論を破らむと。勞ける籍なるが。初品に。迦毘羅。優樓迦。勒沙婆。三仙が事を論へる次に。又有諸

師。行。自。餓。法。投。淵。赴。火。自。墜。高。巖。寂。默。常。立。持。牛。戒。等。是。名。善。法。と云へる所の疏に。此を精しく説きて。此中凡列十師。一。迦毘羅。三寶行。世。二。優樓迦。三寶行。世。三。勒沙婆。三寶行。世。第四師。以。自。餓。爲。道。第五師。以。投。淵。求。聖。第六師。以。赴。火。爲。道。第七師。自。墜。高。巖。求。道。第八師。以。寂。默。爲。道。第九師。以。常。立。爲。道。第十師。以。持。牛。戒。爲。道。前之三師。廣。列。經。法。以。三。寶。行。化。後。之。七。師。直。辨。苦。行。而。已。と云ひ。

なほ言へる説に自餓法者。或一日食三果。或吸風服蘇。或服氣也。寂默者。若提子論師立。非有非無爲宗。明一切法。若言是有。無一法可取。若言是無。而万物歷然以心取境。無境稱心。以境取心。無心稱境。故云。非有非無。嘿然無言。持牛戒者。如俱舍論說。合眼低頭食草。以爲牛法。彼見牛死得生天上。即尋此牛。八万劫來。猶受牛身。不達爾前有於天因。謂牛死得生天。是故相與持牛戒。成

論云。持牛戒若成則墮牛中。如其不成則入地獄。然外道苦行。世人信之。なども云へり。百論は。專と異論を破れる書なる故に。疏にも外道のこと委しく見ゆて。中には論ひ得たりと見ゆる説も。はた無きにあらず。○俱舍論の立應音義に。塗灰外道。遍身塗灰。髮即有剃不剃。衣纒蔽形。但非赤色爲異耳。奉事摩醯首羅天者也。普行事那羅延天。頂留少髮。餘盡剃去。內衣在躡纒蔽形醜。其衣染似赤土色也。と見ゆ。俱舍論に。外道狗牛等禁とある。遁麟記に。外道不知狗牛過去有順後生天之業。但見狗牛死得生天。便謂食草噉糞是生天之因。故以効之名狗牛禁。また龍猛論師が大論にも。種々異論を破れる説の多かる中に。以灰塗身。裸形無恥。以人糞。盛糞而食。拔頭髮。臥刺上。倒懸。熏鼻。冬則入水。夏則火炙。食菓菜草根。牛屎。穢穢。水衣。一日乃二日一食。

或。陰風飲水など云へる穢行も。涅槃の説に依るときは。是また佛祖が。金剛涅槃の所爲となるをや。

凡て彼大乘と云へる諸經は。末に辨ふる如く後人の佛祖に託して。己が向々さかしらを述べたる物なるが。佛祖を稱へ揚げむとして。却りて甚く云ひ貶さしむる説のみぞ多かる。隣むべし。佛祖は。千重の濡衣をこる著たりけれ。然ればよし。此論を心に應はで。論ひ直さんとすとも。大乘を信らむ限りは。其濡衣を脱ぎ得させむこと叶はず。此に於きて大乘を捨て。謂ゆる小乗の學に入りたらむには。始めて供に。佛法の眞面目を語るべくなむ。

さて外道等が妖行。ますく募りて其惡弊を。國人等は更なり。獸類までに及ほしけり。其は西域記。阿耶穆佉の下に。大城東兩

河交廣十餘里。東合流口。日數百人。自溺而死。彼俗以爲願求生天。當於此處。絶粒自沈。沐浴中流。罪垢消滅。是以異國遠方相趨。萃止七日。斷食後絶命。

河下して沐浴く事は。上に論ふ如く。眞の道に叶へる行なれど。斷食して絶命する事は。即自餓法の惡弊なり。

至於山猿野鹿。群遊水濱。或濯流而返。或絶食而死。當戒曰王之布施也。有一獼猴。居河之濱。獨在樹下。屏迹絶食。經數日後。自餓而死。

こゝ惡法の弊の獸類まで及べるなり。總じて惡法盛り行はるゝは。其やかて。妖氣の行はるゝなる故。かゝる奇異の事あり。禽獸は更にも云はず。虫魚草木まで及ぶ。其一二を云バ。西戎籍宣室志と云ふもの。石窓といふ者。夏のころ雁門關と云ふ所へ行く。暑盛なるに疲れて。大木の下臥し

たる。夢に一僧來りて。我が廬の南。窮林積水あり。暑を清むべし。我も偕ひて遊び給へと。石窓伴はれて。西の方數里を行けば。窮林積水あり。群僧水中あり。石窓怪みて問へば。僧云く。これ玄浴池なりと。水中の群僧。狀貌異ならず。已も日暮るゝ。一僧云く。吾徒の誦經を聞かむと欲するかと。石窓去かりと云へば。群僧水中に聲を合せて噪し。食頃ありて。一僧すなはち。石窓が手を取りて偕も浴す。其冷ゆること甚し。驚き寤れば。衣盡く濕ひたり。明日道がら。蛙の鳴くこと甚し。夜夢みたる所は類たり。謂ゆる誦經の音なり。往きて尋ぬる。窮林積水あり。蛙甚多し。果して玄浴池と云ふものなり。群蛙儼然として。昨日の僧の如しと見ゆ。また故事要語と云ふ書に。漢籍皇朝類苑を引きて。宋の熙寧年中に。李賓と云ふ人。潤

州に知らるる時に。其園中の茶花。悉く荷花となりて。各々に一佛の形あり。彫り刻むが如く。其數を知るとなし。暴乾せども。其相依然たり。李が家ハ佛に奉ずると甚だ篤き故に。此異ありと。本朝にも元祿壬午の四月に。茶花結びて荷花をなす。中國皆然り。此時沙門公慶。南都の大佛を再興し。たましく開眼の年。逢ふ故に。此異ありとて。頑民摘み取りて此を箱よし。禮拜供養して。佛縁を作ことありとも見ゆ。人正を好み。正氣これに應じ。人異を好み。異氣これに應ず。うは近き頃江戸人など。葬花の異なるを好む故に。年々異花を生じて。其好に應ずるに似たり。實は似るに非ず。其變を好むハ。やがて妖を招く理ある故に。妖氣の是に應ずるなり。愚人のさる事としも得知らずて。珍ほどはしり喧らめるハ。最も憐むべき

事よころ。眞の道よ志有らむ人は。深く思ふべし。此は事の因よ。少か驚しおくのみ。

故諸外道。修苦行者。於河中立高柱。日將且也。便即昇之。一手一足。執柱端。隔傍杙。一手一足。虚懸外伸。臨空不屈。延頸張目。視日右轉。逮乎暉暮。方乃下焉。若此者。其徒數十。冀斯勤苦。出離生死。或數十年未嘗懈怠。と有を見て知るべし。

此外道らが。彌猴に倣ひて。かゝる行する事は。やがて妖氣に相率れるなり。佛法を甚く信ずる徒にも。古今にかゝる倫は。あまた聞ゆたり。

さて外道の數は。楞伽經に。百八部。邪見とあるは。此よなき多數なれど。餘の經論どもには。九十六種外道と云へるぞ多かる。

古くは別譯雜阿含三卷に見ゆ但し。此數も。說一切有部律に。

外道六師各出十六種。合九十六種是也。とあれば。是も例の虚
數にぞ有ける。然ればこそ。大毘盧遮那經に。三十種外道と云
ひ涅槃論に。二十種外道なども云へり。

斯て右の多數は。佛法をも入れて。九十六種とは云へり。其ハ分
別功德經に。九十六道之中。佛道以爲其最。と云へるよて知べし。
また大集經に。佛道の事を。勝於一切九十五道。と云るも。佛道
を入れて。九十六種の意なり。

然れば印度よて。諸道を指して外道と云ふも。元來ハ四吠陀
論を奉ずる梵志より。他道を貶せる語なるを。佛者を始め。外道
よも倣へるにぞ有るべき。

其は金七十論ハ。佛道より云へバ。外道の書なるよ。佛道また
他道を。凡べて外と云ひ。上に引く阿含に。梵志と外道とを佛

も別ち。九十六種外道と云ふハ。佛を入れてなるとを。思ひ合
せて察らるゝなり。

さて大涅槃經に。外道九十五種。皆趣惡道。とある所の音義に外
道者邪見猥雜不堪。糺說所行所執。各々不同。今且略舉數般。以明
差別。所謂數論勝論。執我計常。五熱炙身。編椽臥棘。塗炭搦食。翹足
裸形。自餓投河。鷄狗等戒。板衣苴草。赴火投巖。矯亂鬪體。習諸邪定。
無利勤苦。不得解脫。是故經言。皆趣惡道。瑜伽六七。顯揚九十。廣辨
宗途。如彼二輪戒禁所執。以顯相從。總攝論之。不過十六。如論中頌
曰。執因中有果。顯了有去來。我道宿作因。自在等實法。邊無邊。矯亂
計。無因斷空。最勝淨吉祥。名十六異論。一因中有果。宗二從緣顯了。
宗三去來實有。宗四計我實有。宗五諸皆常論。宗六宿作因論。宗七
自在等因。宗八實爲正法。宗九邊無邊論。宗十不死矯亂。宗十一計

無因論宗。十二計七斷論宗。十三因果皆空宗。十四妄計最勝宗。十五妄清淨宗。十六妄計吉祥宗と云へり。是にて佛道より外道と指したる諸法を。總攝し盡せり。是を以て。九十六種と云ふは。虚數なること。明に知られたり。

然れどなほ。出定後語の外道篇をも見べし。

さて阿含經中に。究羅檀頭婆羅門と云へるが。五百特牛。五百特牛。五百特犢。五百特犢。五百殺羊。五百羯牛を辨じて。祀に供せむと欲せり。と云へる類の甚じき法は。みな外道法に轉化せるなり。彼經中に。唯に婆羅門とあるも。能く其行を。眞の梵法と。外道法とを見分つべきなり。

此次に大梵天王の製し賜へる悉曇文字は四十七言ありと云へれど。實は梵天の人間に傳へたる古字は。三十五字にて。

其本は十四字なるべき論。また佛祖滅五百年後。迦膩色迦王の比にもや有む。没備尼仙と云ふが。聲明論。及十八章等をも撰びたること。又五明大論とて。聲明。巧明。鑿明。因明。内明などいふも。本は婆羅門の四吠五論と。毘伽羅論とを。外道輩が竊みしを龍猛が再竊みて。佛法の物と爲したる事をも委しく論はれたり。

○大千世界品上第四

此品凡て五卷の本文は。長阿含世記經を採り。其餘の三阿含に。往々世界の事を記せる説ども。まれ起世經。起世因本經。樓炭經。立世阿毘曇論などは。世記經の異本異譯なれば。考へ合せて拔萃し。其腐々しき妄説どもは。總べて載せず。されは其由は。その節々に辨へつ。其意して見るべし。

○
如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園俱利窟中。與大比丘衆千二百五十人俱。時衆比丘於食後集講堂上。議言。諸賢未曾有也。今此天地何由而成。何由而敗。衆生所居國土云何。爾時如來於閑靜處。天耳徹聽。聽如是議。於靜窟起。詣講堂坐。知而故問。汝等向者議何等事。諸比丘白。佛言。我等食後議是天地何由而敗。何由而成。佛言。善哉々々。凡出家者應行二法。一賢聖默然。二講論法語。集在講亦應如是。諸比丘汝等欲聞天地成敗衆生所居國邑耶。諸比丘白。佛言。唯然。願樂欲聞。如來說已。當奉持之。凡て佛經説は。佛在世より繼々に。比丘等。老少口々に誦唱し來れる。前言往行なるを。佛滅後に。各々の部執起りて。諸部に分派し。其より數百歲後に。其諸部にて。各々に傳誦せる説法を。始めて記載せる物なるが故に。必ろの初發に。如是我聞とも。聞如是

とも。我聞如是とも記出る事にて。同事の説法にして。經々互に異同あるも。是由にぞ有ける。

此は富永仲基説に。我者何。後世説者自我也。聞者何。後世説者傳聞也。如是者何。後世説者傳聞如是也。と云るが如し。此餘に護法者流の説ども多かれど。悉誣言にて。論ずるに足らず。

舍衛國祇樹給孤獨園などの事は。下に云を見よ。千二百五十人と云る比丘の數。拘はる事なかれ。然るは長阿含經は。篇ごと必千二百五十人と云るを中阿含經にハ。其數を云ず。

希に云。こと有ときは。千比丘と云へり。

增壹阿含經に。數を云。ときハ。必。大比丘衆五百人と言。る如く。諸經各々。一定の文法あれはなり。

是また諸經悉く。後世に各々思ひくに記載せる物なる一

の證なり。

さて比丘らが。天地の成敗。また衆生の所居たる。國土の斯て在る事を。未曾有なる事に。思ひ怪めるハ。諸なる事に。其趣今も見る如く所思ゆ。圓通菩薩が梵曆策進に。夫現住所依の天地を。何と推檢せざるを。豈學を好むと云。べけむや。と言へるハ。實に然る言なり。

未曾有といハ。佛書の常語なり。俗言に。不測と云。が如し。未曾有と。かけたる文字に泥むべからず。

然るに。佛祖が教説は。下に次々論ふ如く。すべて妄誕なり。比丘ども其由を辨へず。信受奉行せるは憐むべし。

佛告比丘。諦聽々々。善思念之。當爲汝說。今此大地。深十六万八千由旬。其邊無際。地止於水。水深三千二十由旬。其邊無際。水止於風。

風深六千四十由旬。其邊無際。其大海水深八万四千由旬。其邊無際。須彌山王入海水中。八万四千由旬。出海水上。高八万四千由旬。下根連地。多固地分。其山直上無有阿曲。生種々樹。樹出衆香々。遍山林。多諸賢聖。大神妙天之所居止。其山下基純。有金沙。

樓炭經に。佛告比丘。是地深六百八十万由旬。其邊際無限。其地立水上。其水深四百六十万由旬。其邊際無限。其風持水。其風深二百三十万由旬。其邊際無限。其海深八百四十万由旬。其邊際無崖底。須彌山王入大海水。八万四千由旬。高亦八万四千由旬。下狹上稍々。廣上下正平。種々含生類在上止。悉滿無空。諸神亦在上止。諸尊復尊天神。悉在上居止。と言ひ。起世經にハ。佛告比丘。此大地厚四十八万由旬。邊廣無量。此之大地。住於水上。水住風上。風依虛空。此大地。下所有水聚。彼水聚厚三十六万由旬。廣無量。其須彌山

王入海水中。八万四千由旬。出海水上。亦八万四千由旬。須彌山王其底平正。下根連。其須彌山王於大海中。下狹上廣。漸々寬大。端直不曲。牢固大身。微妙最極。生種々樹。其樹鬱茂。出種々香。其薰遍山。多衆聖賢。最大威德勝妙。天神之所住居。と云り。大地。水。風。海の深。など。二經共に本文と異なり。

此二經實ハ本文の異本なるに。如此き異有バ。其餘の經論どもに。異説多こと。准て察ふべし。増一阿含經にすら。此地厚六万八千由旬。須彌山頂。東西南北。縱廣八万四千由旬と云り。況て大乘と云。經々に。異説多こと云も更なり。さて須彌山の海水。上に出ると海水に入るとの由旬數ハ。本文と二經よく合れど。他經論にハ。合ざるが多し。ろは起世因本經。また大論にハ。四万二千由旬と云へり。但し

増一阿含よハ。本文および二經と同く。須彌山。出水。上。高八万四千由旬。入水。亦深。八万四千由旬とあり。

餘事の教説にハ。其時々。の謂ゆる方便にて。異説の出來むこと。有まじきに非れど。此等の數量にハ。決めて異有まじき事なるに。如是き相違ある事ハ。元これ佛祖が造説にして。其時々。口任せて。左も右も説出せるを。諸比丘らが。聞取れるまに。次々誦し傳へて。其を遙後世に。各々さかしらをも加つ。記載せる故なること。上にも下にも辨ふるが如し。

然レバ此品。また次々の諸品に見ゆる。遠近廣狹淺深などの數量ハ。さしも論ふに足らざれば。其相違をも。逐一にハ論せず。云はでハ有まじき事のみを云ふなり。

須彌山ハ。大般若經。音義に。蘇迷盧山。梵語寶山名。或云須彌山。或

云彌樓山。皆是梵音聲轉不正也。正梵音云。蘇迷噓。噓字轉舌。唐云。妙高山。大論云。四寶所成。曰妙。出過諸山。曰高。或各妙光山。以四色。空。光明各異。照世。故とあり。

また俱舍論音義に。蘇迷盧此云妙高山。亦言好光山。と見ゆ。海龍王經音義に。安明由山。即須彌山也。亦言迷樓山。正言蘇迷盧山。此譯言好光山。亦言好高山。と云ひ。不思議境界には修迷留。大密積に。彌樓山ともあり。

さて立世論地動品に。佛告富樓那比丘。是地界住。水界上。是水界住。風界上。是風界住。於空中。風力上昇。圓轉相持。厚九億六万由旬。廣十二億三千四百五十由旬。周廻三十六億一万三千五百由旬。此風上際。即是水界。停上安住。無有散益。厚四億八万由旬。廣十二億三千四百五十由旬。周廻三十六億一万三千五百由旬。此水上

際。即是地界。安住不動。厚二億四万由旬。廣十二億三千四百五十由旬。周廻三十六億一万三千五百由旬。とあり。此また上に引く書等の。由旬數と甚く異なり。

なほ大毘婆沙論。俱舍論などの異説は。下に擧るを合せ察べし。

さて此山の莊嚴。また高さ廣などは。佛祖が妄誕なれど。是山世界の中央に在て。其下根は。大地に連き。其頂上は。諸尊大神妙天の居止する處。といふ説などは。元より梵志に傳はる違陀論の古説を。其儘に取用ゐたるなり。

其は下文忉利天の章に。委く辨ふるを見て知べし。

然れば。蘇迷盧といふ名も。元より古傳なること著明なり。然れど。妙高。妙光。好高などいふ譯語は信られず。

須彌山外有佉陀羅山高四万二千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所成。二山中間有水。廣八万四千由旬。周匝無量。生諸雜華。其表有伊沙陀羅山高二万一千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所成。二山中間有水。廣四万二千由旬。周匝無量。生諸雜華。其表有樹提陀羅山高一万二千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所成。二山中間有水。廣二万一千由旬。周匝無量。生諸雜華。其表有善見山高六千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所成。二山中間有水。廣一千二百由旬。周匝無量。生諸雜華。其表有馬祀山高三千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所成。二山中間有水。廣六千由旬。周匝無量。生諸雜華。其表有尼彌陀羅山高千二百由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所成。二山中間有水。廣一千二百由旬。周匝無量。生諸雜華。其表有調伏山高六百由

旬。縱廣亦同。其邊廣遠。間廁。七寶所成。二山中間有水。廣六百由旬。周匝無量。生諸雜華。其表有金剛輪山高三百由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。間廁。七寶所成。二山中間有水。廣三百由旬。周匝無量。生諸雜華。去是金剛輪山不遠。有大海水。起世經云。須彌山次有山名佉提羅迦。其次有山名伊沙陀羅。其次有山名遊提陀羅。其次有山名曰善見。其次有山名馬半頭。其次有山名尼民陀羅。其次有山名毘那耶迦。其次有山名斫迦羅。此言輪也。

去輪圓山。其間不遠。邊有空地。青草遍布。即有大海。と云ひ。山々の高。また其山々の中間なる水の廣など。凡て本文に同ければ。其ハ省きて引たり。

樓炭經に八重山者。第一山名阿多利。高百六十万里。第二山名伊

沙多高百三十四万里。第三山名、逾安多。高四十八万里。第四山名、善見。高二十四万里。第五山名、阿波尼。高十二万里。第六山名、尼彌多羅。高四万四千里。第七山名、維那兜。高二万二千里。第八山名、遮加和。高一万二千里とあり。云々

此に九山の事をも委く説れたり。

さて須彌山より。此、金剛輪山まで九山。また其、山々の中間なる八水を總ねて。九山八海なり。

下に引く立世論も。此、數も同じ。起世經。樓炭經ハ。云も更なり。然るを大毘婆沙論。俱舍論など。凡て諸論ハ。此ハ。金剛輪山なく。謂ゆる四洲海の外なる。二鐵圍山の一山を擧て。九山八海といふ數を合せ。

ろハ俱舍論ハ。九大山者。妙高山王處中。而住。餘、八周匝。遶、妙光

山。於、八山中。前、七名。内、第七山。外、有大洲等。此外、復、有鐵圍山。周匝、如輪圍。一世界。妙高爲初。鐵圍爲後。中間有八海。前、七名。爲内。第八名。外。と云るを見て知べし。

此なるをバ。須彌山を除きて言。ときハ。諸書ハ。七山七海と云へり。

其ハ西域記ハ。蘇迷廬山。在大海中。七山七海環峙環列。七金山。外。乃鹹海也。と云るを見べし。

抑、阿含の諸經ハ本なり。諸論ハ末なり。況て婆沙。俱舍ハ。作者も著明ハ知る。最後の世の書なるハ。何ぞも。本を捨て末を取れる。と考ふるハ。阿含の經にハ。左も右も。諸部ハ誦し來れる隨ハ。記載せる物なる故ハ。前後うち合。ざる異説おほく。諸論ハ後世の論師らガ。本經に拘はらず。前後うち符ふべく作れる物なる

故に。悉く論部の書にハ據なりけり。

其は古今の比丘ら。盡く彼佛習に繫縛せられて。諸經説きは。みな佛口より出たる眞説にて。阿難らが。其佛口のまに記せる物と信じて在れば。彼此うち符ざる説の。綻び見ゆつゝも。其を校正雌黄して。眞説を見べき物とハ思たらず。徒に尊奉して。事實のやごとなき説どもハ。凡て俱舍論などに據るなり。知らずやも。彼論などハ。佛説にハ本づきたれど。各々ろの論師らが説なりとば。故今ハ阿含の本經佛説を校合雌黄して。佛説の大千世界を論ずること。前後の説の如し。俱舍論。立世論等の世界説をのみ。見知れる比丘ら。訝ること勿れ。同じ阿含の經なるに。増一。七日品に。佛告。比丘。須彌山。南有。大鐵圍山。長八万四千里。高八万里。云々とあり。此ハ山の次第。其餘も

大か九發智論。大毘婆沙論。俱舍論などの説相に同じ。

大毘婆沙論ハ。發智論を譯し。俱舍論ハ。大毘婆沙論を畧論せる物なる故に。其説相大かたハ同じ趣なり。然れば發智論ハ。立世論に本づけりと見ゆ。うハこれ諸論の祖なればなり。さて彼も此も佛説なりと云に。右の如く異なるハ。是ぞ後世各々に。如是我聞と稱して。己が向々杜撰を加たる所以なりける。立世論ハ如是我聞を多く品末に云り。此ハ阿含。樓炭。起世等の經々よりも。殊に後世なるが故なり。然るを東森菩薩が學には。右の諸經を專と採らず。此論によりて。測量を合せ。經々論々。かく異説ある事の議に及ざるは。奈何ぞや。

佛説の本たる經説を捨て。末なる論を取むれば。其異同を辨

明して。取捨せる用意を述すば。有まじき事ならずや。
故考ふるに。此を辨明する時は。佛説悉く破れて諸經論一部も。
佛祖が當時の物ならぬこと。忽に顯れて其説を張。こと能ざる
故と見ゆたり。

須彌山儀銘解に。正法念處經には。唯六万山。須彌を圍繞すと
説て。七金山の義を明さず。俱舍等には。唯七金山を明して。六
万山の事を説ず。而るに立世には。七金山に惣じて。一千十六
峯有。ことを明せり。俱舍等に。惟七金山と説くは。其山海の界
分差別なるに。約して只七山とし。立世論は。稍詳にして其七
金山の其の大峯を明し。正法念經は。廣く諸天の依報を明す
が故に其大峯別峰。盡く是を擧て。六万山と稱す。略説の中に。
密なる事あり。廣説の中に。闕る所あり。彼此照應して。其詳を

得べし。經論に。總じて此義多し。一端を以て概論し難きこと
知べし。と云るは。和會し得たる如く聞ゆれども。此等の事は
然も有らば有れ。經々論々。悉く數量事實に。相違あるをば。何
とする。

金剛輪山外。亦有大海水圍繞。北岸有大樹王。名菴婆羅。圍七由旬。
高百由旬。枝葉四布五十由旬。北有天下。名鬱單越。其土正方。縱廣
一万由旬。人面亦方。像彼地形。
起世經に。須彌須王北面有洲。名鬱羅究留。其地縱廣十千由旬。
四方正等。而彼人面還似地形。其究留洲有。一大樹。名菴婆羅。其本
縱廣七由旬。下入於地。二十一由旬。出高百由旬。枝葉垂覆五十由
旬と見ゆ。樓炭經に。須彌山王北有天下。名鬱單越。廣長各四十万
里正四方。有大樹。名銀莖。圍二百八十里。高四千里。枝葉分布二千

里と云ひ。立世。四天下品に。爾時比丘白。佛言。北鬱單越。國土若大。佛告比丘。北鬱單越大。東際長二千由旬。西際二千由旬。南北亦爾。周八千由旬。以金山城之所。圍繞。黃金爲地。晝夜常明。是鬱單越地。有四種德。一者平等。

謂平等者。彼國土中無有坑窪。亦無穴居。又不歌灰。無有高下。亦不泥滑。故名平等。

二者寂靜。

其寂靜者。彼國土中無有師子虎豹熊羆毒蛇蜂蠆能害人者。故名寂靜。

三者淨潔。

其淨潔者。於彼國中。無有死屍死蛇死狗諸不淨物。若彼民人大小便利。地圻受之。受已還合。故名淨潔。

四者無刺。

其無刺者。彼國土中無利刺樹。無臭氣樹。故名無刺。

彼中有草名曰車毘。其色紺青。形甚可愛。如孔雀頂。觸時柔軟。如迦真衣。

迦真衣者。不可染汚。夏冷冬温。

又如阿時那衣。

阿時那衣者。燒之。不然。車毘亦如是。

是車毘草。遍覆其地。四時不凋。長惟四寸。其國諸江。八切德水。

俱舍頌疏に。

岸渚及底。並布金沙。其水恒流。無有增減。金提堅固。永無崩落。佛說如是とあり。

是謂ゆる須彌四洲の一なり。大毘積經音義に。四洲者。爾雅云。凡水中可居曰洲者。妙高山四面。大海中各有一洲。東曰勝身。南曰瞻部。西曰牛貨。北曰高勝也。とあり。此洲を。また北俱盧洲とも云ふ。大般若經音義に。北俱盧洲古名鬱單越。或名鬱怛囉。或云鬱多羅狗樓。或名郁多羅鳩留。皆梵語。輕重不同也。正梵音云。嚙咀羅短嚙。此譯爲高勝也。と云ひ。大涅槃經音義に。北俱盧洲。此云高上。地四方正等。人面如之。定壽千歲。如天快樂。佛法不聞。とも北鬱單越。此云勝所作。謂彼國人所作。皆無我所勝。餘三洲也。とも言へり。また因本經音義に。鬱多羅究留。梵語北洲名也。或云北鬱單。在妙高。北大海之中。其正方四海之中。此其一也。雜阿毘曇心論音義に。鬱單曰。或言鬱怛羅越。正言鬱怛羅究留。此譯云高上作。謂

高上於餘方。鳩留此云作。亦云姓。未詳何義立名也。起世經音義に。鬱單越。或言鬱拘樓。正言鬱怛羅究瑠。此譯云高上作。鳩留此云作。亦云姓也。六波羅密多經音義に。北拘盧洲。梵語此云高勝。在大鹹海中。其形正方。定壽千歲。無中天者。常受快樂。次於諸天。故言高勝也。など云をも。合せ見て知べし。

さて阿含起世樓炭。因本の四經ともに。鬱單越洲品と瞻部洲品は。別よ立たれど。次なる東西兩洲の事ハ。諸品の因々よ記して。其品々ハなし。此ハ由縁ある事なり。

南瞻部洲の章よ。論ふを見べし。

南岸有大樹王。名曰閻浮。圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。南有天下名閻浮提。名閻浮者。下有金山。高二十由旬。因閻浮樹生。故得名閻浮金。其土南狹北廣。縱廣七千由旬。人面亦爾。像此地形。

此上より東岸西岸なる大樹王の説あれど今略つ。

起世經に。須彌山王南有洲名閻浮提。其地縱廣七千由旬。北廣南狹如車廂。其中人面還似地形。此閻浮提有一大樹名曰閻浮。其本縱廣七由旬。下入於地。二十一由旬。出高百由旬。枝葉垂覆五十由旬。而彼樹下有閻浮檀金。聚高二十由旬。以金從於閻浮樹下出生。是故名爲閻浮檀。閻浮檀金因此得名と見ゆ。樓炭經に。須彌山王南有天下名閻浮利。廣長各二十八万里。南狹北廣有大樹名閻浮。圍二百八十里。高四千里。枝葉分布二千里とあり。閻浮樹は。なほ本書に。其果如簞。其味如蜜。樹有五大觚。四面四觚。上有一觚。其東觚果。乾闥婆所食。其南觚者。七國人所食。

此七國は。拘樓國。拘羅婆。毘提。善毘提。曼陀。婆羅。婆利と云。

其西觚果。海蟲所食。其北觚果。禽獸所食。其上觚果者。星宿天所食。

なと言へり。

立世論閻浮提品に。佛説比丘。有樹名曰閻浮。因樹立名。此樹生閻浮地北邊云々

閻浮提ハ。大般若經音義に。南瞻部洲。瞻部。梵語此大地之總名也。古譯或名譚浮。或名琰浮。或名閻浮提。皆梵語訛轉也。正梵音云。譚謨。阿毘曇論説云。有譚部樹。生此洲北邊泥民陀羅河南岸。正當洲之中心。北臨水上。於樹下水底南岸下有瞻部黃金。古名閻浮檀金。樹因金而得名。洲因樹而立號。故名瞻部也と見ゆなり。

雜阿毘曇心論音義に。閻浮提。或言剌浮洲。提者畧也。應言提鞞波。此云洲と見ゆ。起世經音義も同じ。六波羅密多經音義にも。此大地之總名也。四回一大鹹海圍繞。故名爲洲。北廣南狹。其形三角と云ひ。また閻浮此云勝金とも云へり。

是洲のこと。本經閻浮提洲品を始め。樓炭經。立世論など。其外の
經論どもにも。最精く所見たるが。其名ころ元より有つれ。事は
悉。妄誕なれば。總ては載さず。

但し下節に擧る事ども。凡て妄説には有れど。人の昔ねく
云ふ事にし有れば。一通り知らずは有まじき事なる故に。載
せるなり。

さて北洲を方とし。東洲を半月とし。西洲を圓とし。南洲を三角
とせるは。地水火風。四大の形を表せるなり。

此は東森菩薩も。早く方は地の三摩耶形なり。圓は水の三摩
耶形なり。三角は火の三摩耶形なり。半月は風の三摩耶形な
り。三摩耶をまた三摩提と云ふ梵語なり。此云等持。離昏沈掉
擧。日等。住一性。日持と云るが如し。

さて閻浮と云名の。古名なる事は。何にして知ると云ふに。上に。
引く音義に。瞻部と云が。正梵音なり。と云るに就て案ふに。西域
記に。中印度境瞻波國。周四千餘里。國大。都城北背。殑伽河。周四十
餘里。在昔劫初。人物伊始。野居穴處。未知宮室。後有天女。降迹人中。
遊殑伽河。濯流。感靈有娠。生四子焉。分瞻部州。各擅區宇。建都築邑。
封壇畫界。此則一子之國都。瞻部洲諸城之始也。と有にて所。知た
り。

天女の河に遊び靈に感じて。四子を生る事。頗る鴨。御祖。玉依
毘賣。命の賀茂川に遊びて。神靈に感じ。若雷。命を生る故事に
似たり。

此は。在昔と云より末と。疑なく古傳説にて。謂ゆる印度記など
の説と見ゆれば。瞻部と云ふ洲名は。もと此瞻波國に天降れる。

天女の四子を分封せる故に。一國の名の。一洲に及べるにぞ有ける。

此は例を云はゞ。皇國にも一郡の名を一郡に及ほし。再うの一郡の名を。一國に及ほせる例いかほども有り。今も其類と知るべし。

故是以て。此國を瞻部洲諸城之始也。とは云り。然れば瞻部は瞻波の轉語なり。語義は詳ならねど。彼天降れる天女の名にもや有けむ。

人名を國名に爲たること多かり。

然るを佛祖うの古説を翻案して。閻浮樹。閻浮金などの妄説を造れり。

凡て佛祖が妄説の趣は。上にも云る如く。大かた本よりの古

説を。翻案せる物なるが。此餘にも。地名に就ての翻案は。なほ多く。うは西域記に載せる。僧伽羅國の因縁は。獅子ちふ獸が。人の女をとりて。交通して。生せたる男子の。開ける國なる故に。僧伽羅と號たり。と云ふ古説なるを。僧伽羅と云し商人が。五百の商人と共に。過ちて五百の羅刹鬼女の島に至れるを。福智ある者にて天馬の救を受て。免れ歸りしかは。羅刹鬼女。いと淑美しき形となりて。僧伽羅が國に至り其國王に。僧伽羅が不情を訴ふるに。王うの美姿に惑ひて。僧伽羅が。うを鬼女なりと諫むるを用ゐず。其女を納れて妻とす。然るに。彼鬼女夜に入りて。本の住所に還り。五百の鬼女を將て來り。王宮なる人どもを。皆食ひ盡せる。此に於て。其國の王臣共に。僧伽羅が福智を仰ぎて。其國を讓れる故に。其國の號を。僧伽羅と

云、よしにて。其時の天馬は。今の我身是なり。其鬼女は某女なり。其王は。今の某なりと。腐々しく翻案の妄説せること。阿含に見ゆるたるをも思ふべし。然る類ひなほ多かり。此事西域記にも。二事並べて。委く載せるが。玄奘が心にも。其翻案をば。悟りつと見ゆるて。前なる故事を本に記し。後なる故事をば。佛法所記。則云々。と次に載せり。西域記は。總て印度記などの類。よる書の有て。記せる書と見ゆるは。前なる故事も。さる記より採りて。載せるよやあらむ。

然は有れど。其身これ中印度の産にして。其在世中に。印度を巡行せる迹を。四阿含中の事實に據りて考ふるに。南印度邊は。常に巡行せれど。西印度邊をば。廣くも巡らず。況て東北二印度などは。其道の口邊のみ見たる故に。五印度を總ては。委く知らず。

此は四阿含中に。一時佛在某國某所。云々とある文に。昔ねく心を着て。讀見べし。大抵は。中南。二印度の國々なるをや。

また其世の人。なほ世の古かりしかば。東北邊などは。能く知れる人なきを幸として。人も知らず。實ハ吾もは知らざる。東北邊の事を。彼天眼をもて見知れる由よて。謾に大言の妄言を放ち出せる物なり。

其ハ雪山と。阿耨達池の方位を違へるよて。東北邊を知ざること炳焉く。西印度の極を。大海なりと云るよて。彼邊を知ざる事も灼然かり。

偕かく妄説せる本を。何と考ふるよ。金七十論よ。如天上北鬱單越。非證量比量所知。信聖語故。乃可得知名。聖言者。如梵天所說四達陀。と有り。

文意は。梵天界。忉利天界など。天上のこと。北鬱單越。俱盧の事など。人の證量比量を以て。知る所は非ず。四達陀典は傳はる。梵天の聖語を信ずる故は。知ことを得つれ。と言ふなり。

然れば。大地の中央なる處を。蘇迷盧山と稱し。其高頂を忉利天上と云ふこと。其北方は。俱盧てふ國ありと云ふこと。元より四達陀論中は在て。其は彼天降れる梵天の。婆羅門は傳たる古語なること。著明なり。是をもて舊く梵志ら。其國は。蘇迷盧山の南は在てふ意をもて。南瞻部と稱し。北俱盧と。南北相對し語り來りしを。佛祖その古説を採用せる物から。本説の隨よては。梵志説は勝がたき故は。東西兩洲の妄説をば作り加たる物なり。もし實は東西兩洲の説も。古傳ならむは。金七十論は引く。

四達陀の説は。此兩洲の事をも。云はず。得有まじき物なるは。此事二所は有れど。東西兩洲の事なし。心を平よして味ふべし。

かくて瞻部と云ふ。大樹の名とし。其に對せむが爲に。北俱盧にも。菴婆羅ちふ大樹の名を作り。妄説の東西兩洲にも。伽藍浮。斤提二大樹の名を設けて。其國々の事ども。仲山に妄説せる物なり。故是を記載すれども。除て論せず。妄説といふ一言をもて。是を弊せり。其は立世論に。東西兩洲の事を説畢れる所に。佛爲諸比丘説。此因縁。是故得知と云ふ文に。心を著て見よ。南北兩洲の説は。元より傳へ來つる故に。人も知たれど。東西兩洲の説は。佛説によりて。始めて知ことを得たり。と云ふ文意なるをや。

もし妄説ながらも。知らまはしく思はむ人は。長阿含。世記經。

起世經。樓炭經。ともに。南閻浮提品。北辭單越品ありて。共にいと委しく見ゆたり。就て見べし。立世阿毘曇論。大毘婆沙論もしかり。斯て右の經論ども。何れも南北兩洲の品品有れど。東西兩洲の品々なきは。自然に虚説の隠れて。實事の顯はるゝ一端とも云べくや。

さて立世論の閻浮提品に。上の小註に。文畧して引如く。閻浮樹の事を載して。如是之事。云何知耶。昔王舍城。有兩比丘。具神通力。從佛口聞。閻浮樹。相共至樹。所見樹果。熟墮地。從其蒂孔。授手至臂。其最長指。猶不至核。牽手而出。爲果。所染手臂皆赤。其果香氣能染人心。是二比丘還王舍城。說如上事。時有一人名曰長脛。姓拘利氏。是人神通。若行水中。前脚未没。後脚已移。若行草上。草雖未羅。便得移步。是長脛人。即白佛言。我得至閻浮樹。所不佛云。得至是人發此。

向北而去。行度七山。

七山とは。謂ゆる小黑。大黑。多犁牛。日光。銀山。香水。金邊の七山をいふ。

登金邊山。向北遠望。唯見黑暗。怖畏而反。佛問。汝至閻浮樹。不答。言不至。佛問。汝何所見。長脛答曰。唯觀黑闇。佛言。此黑闇色。即閻浮樹。是人更向北。重度六大國土。

六大國土とは。一鳩留。二高臘鞞。三毘提訶。四摩訶毘提訶。五鬱多羅曼陀。六沙熙摩羅野をいふ。此論別。六大國品とて。此國々の事を委しく記せり。

又度七大樹林。林間有河。度是七河。又度阿摩羅林。及訶梨勒林。

この七大樹林。また七河などの事は。下に注ふべし。

乃至閻浮樹。南枝。從南枝上行。至北枝。俯窺見下水。相與常水異。澄

清洞徹都無障翳是人觀已試手攀樹枝脚履水是脚至水如石即
没云何如此是水最輕若以彼水投此間水如酥如油浮在水上若
以此水投於彼水即沈如石

水の重濁なるは浮び輕清なるは沈む理なる故に此説を成
せり。

是人取閻浮一果子還王舍城奉上如來佛受此果破爲多片施諸
大衆果汁染於佛手爾時佛以此手擊於山石至今赤色如昔不異
濕亦不燥掌跡分明因昔分果爲片々故名此石爲片々巖云々と
言るは閻浮樹のこと佛説に幻化られし徒ならでは人の信さ
る説なるを強て信ぜしめむと欲て此論の撰者が殊に作れる
妄誕なり其は如是之事云何知耶と云ひ至今云々と結べる文
意を以ても知られたり。

總てこの阿毘曇論は世起經樓炭經起世經などの説法を信
ざる人に信しめむと彼經々なる説どもの前後合ざる事を
バ前後を合せ絶て人の信じと思ふ説をバ其説迹を造り出
し甚く事實に合ざる説法をは論ひ直しもして彼經々より
は後に作れる書なり是をもて凡ては彼經々の異本とも云
べき物なるを論とは題せり此は護法家こそ知さらめ眞の
活眼をもて書見む閻は初の一二品を見れば自づからに知
なむ物ぞ。

さて此閻浮提といふ號は此全地球をいふ號なる由古人も言
ひ賊に然も有べき事と思ゆるに七千由旬とあるは本朝の
里數に積りて大抵七万六千七百八十一里三十町ほどに當れ
バ甚く大に過たり。

そは大地は圓鉢にて。其周廻は。大抵一万〇〇〇里ほどあり。經
ハ。三千〇〇〇百里ほどなればなり。

是に依て。他書を考ふるに。俱舍論に。南瞻部洲。北廣。南狹。三邊。量
等。其相如車。南邊唯廣。三踰繕那半。三邊各有二千踰繕那とあり。
然れハ三邊ハ。六万五千八百十二里三十一町に當り。一邊ハ。四
里十六町に當る故に。總ては。六万五千八百十七里二十一町あ
り。是にても猶大に過たり。故阿含經中の佛説に。閻浮提洲の事
を説たる所々を考ふるに。先其北方の事を云るに。閻浮樹邊に
空地有りて。其空地に。各々縦廣五十由旬なる。三十七叢林あり。
是を過て。また空地ありて。其空地中に。各々縦廣五十由旬なる
大池。四あり。是を過て。大海水ありて。鬱禪山。金壁山など云ふ大
山を過て。雪山ありと。印度地の山川に及べり。然るに彼雪山よ

り北。謂ゆる葱嶺より。西北東に跨りて。胡國韃地を始め。印度に
は。數倍勝れる大國ども多く。北に向ひて行々けは。西洋人の謂
ゆる。止部里亞の大地に至り。其北の際は。謂ゆる冰海にて。北極
に近きに。佛祖の謂ゆる。閻浮樹といふ。大樹王は更なり。三十七
の大叢林。また四の大地ある由も聞はず。然れば餘の三洲の説
は。更にも云ず。閻浮提洲の説も。凡て妄説なること炳く。閻浮洲
の事として。説る事どもは。佛祖の聞知れる限にて悉印度限の
事にぞ有ける。

よく心を著て見るべし。阿含中に。唐土を始め。諸外國の事を
云へる説法は。一所だに有ことなきは。大地世界をたゞ印度
限の事を思ひて。諸國界の。印度より外に。百千倍なるが多在
ことを。佛祖の時まで彼國人も知らざりしかはなり。阿含の

外なる經論どもに。唐土を始め。外國の事等も且々見ゆたれど。其は互に往來して。外に國ある事を聞知れる後に。作れる經論どもなればなり。

かく印度より外なる。地界の連ける國々をさへに。知ざりしかは其説たる須彌世界。四大洲の説は更なり。謂ゆる大千世界の説も。妄作なること論ひなし。

其は我も知らず當世の人も。昔ねく大地の有狀を知らざるを幸として廣大無邊の幻説を發し。當世の人を欺ける也けり。ろは當世の慕何人どもころ。信用ひて語り繼つれ。後世までを得しも誑かめや。かく言はば。護法者らば。佛祖が時とは。世界の狀甚く變れり。なども言むか。然も有らば。佛は三世了達の智有り。とか云へば何とて後の變をば。説遺さゞりけむ。然

る懸記は。阿含中に所見なし。阿毘曇論に。後世に大地圓鉢の説を發する者有む。と云ことを。懸記せる由見ゆたるに。就て。其を論ひ擧て。地球の説を破り。須彌世界の説を立て。護法喧する者も。今世に在て。衆人の目に。須彌山。閻浮樹。などを仰見れども。見ざるを以て疑ふなれど。其は凡眼なる故に。見ざるにこそあれ。佛の天眼を以て見て。彼山彼樹の有ことを見知りて説たるを。凡心を以て。疑ひ議するは痴人なり。など云とか。然も有らば。なほ大天眼を得たりといふ人の出て。佛祖の説みな妄なり。我が得たる大天眼を以て見るに。此六合の外は。大琉璃丸にて包み。其外に。平坦廣大無邊なる。七寶の空地あり。其空地に。無數の大廣池ありて。一一の池に。無量の世界あり。一一の世界。悉く此世界の如く。大琉璃丸にて包めりな

ど。なほ果しなき妄説を作り出むに。信ざる人の有れば。うれ
凡眼なる故ぞ。見よ。彼處に見ゆるをや。と指し云て。護法
者と諍はむに。護法者はた何とか爲らむ。横に誣たる威を權
用ふるか。彼謂ゆる三百の銖を。心に突れて。氣死するかの二
を出じとぞ思ふ。されは戎人も賢しき倫は。六合の外は存し
て論ぜずといふ。猶賢きは論せざるに非ず。知ざる也とぞ言
へりける。知ざる事を知親して作れる。佛祖の妄説の。實に合
はざることを。是を以て知るべし。

さて此縦廣七千由旬と云。こと。大地の縦廣に合はず。閻浮提と
稱せる。印度の縦廣には。猶合ざるに就て。また考ふるに。鬱單越
を。一万由旬と立て。次々に千由旬づゝを減じたるにて。例の佛
口風の。方量もなき由旬數にぞ有ける。

凡て佛經の辭として。事物の數量を言ひ合する事にて。上
に云る三十七叢林を。各々五十由旬といひ。四の池をもしか
言ひ。此餘何にても。數を合せて云。ぞ辭なる。池林ともに實な
らむには。大小なくて。叶はざる事なるをや。なほ佛經の數
量の。拘はるまじき由を云は。阿含中に。老人の年を云るこ
と。五所はかり有。を。いつも百二十歳とあるは。最も可笑き事
ならずや。唯一人。百二十六歳と云る人あり。佛祖の生涯をり
く。また其前後にも出たる老人の。異人同歳なるべき謂有
むやも。是等の數を合せたるは。中にも慕何慕何しき事なら
ずや。

さて佛説に。閻浮提と云るは。印度の事と聞ゆるに就て。猶案へ
は。阿含の佛説に。印度の國號を云ること見ゆ。是にて益益閻

浮とは。印度限の號に。佛祖の設たる號なること著明なり。斯在は。佛祖の出たる當時は。印度。身毒。賢豆など云。號は無りしを。後に次々にさる號は付たるにて。前品に論へる如く。本は婆羅門國と云ふ號なるを。例の婆羅門を誣破る佛祖の趣意なれば。彼に勝むとして。閻浮提といふ號も因縁も妄作し。猶足すまに。餘の三洲。また大千世界の因縁をも。妄説せる物と知られたり。

但し此は。昔より圓内なる人の。曾て知ず。言ざる事なれば。世には三百矛を受ること。心を痛めて。猶護法言を。發せむとする人も有。べけれど。彼等には拘はる論ひならず。本朝の古道を學びて。圓外に出たる。神活眼の人に諭ふる説ぞ。此。後彼等いかに強言すとも。努々と在。合ふまじくころ。

さて印度の實の縱廣は。西域記に周。九万里とあるは。六町を一里とせる。唐土の里數なるべけれど。此を本朝の三十六町を一里とする里數に直して。一万五千里。

或説に西域記なるは印度の里數にて我が里數に直して五千里なるべし。印度の一里は我が二町なればなり。

なれば。是にて。甚く大に過たること前品に論へるが如し。

されど。閻浮提にも。印度にも。北廣く南狹しと有。は。然すがに閻浮提。やがて印度なる證語の残れる那りける後世。佛者ども此を別にせる説どもは。凡て信ずるに足ず。

大海。水底。有。婆竭龍王宮。縱廣八万由旬。宮牆七重。七重。欄楯。七重。羅網。七重。行樹。周匝嚴飾。皆七寶。成。須彌山王。與佉陀羅山二山。中間。有。難陀跋難陀。二龍王宮。各々縱廣六十由旬。牆嚴飾。亦復如是。大樓炭經に。佛告。比丘。大海底。須彌山。北有婆竭龍王宮。廣長八万

由旬以七寶作。常有五百鬼神守門。大海北邊有難頭和難龍王宮。廣長各二万八千里。以七寶作。と見ゆ。

婆竭龍王宮の門に五百鬼神ありて守ると云こと。本經に漏たり。案ずるに難頭和難龍王とて。一龍王なるを。本經に二龍王に分たり。是より後に出たる經中。増一。雜阿含を始め。皆二龍王とせり。下に擧る起世經は更なり。

起世經に。佛告比丘。大海水下有婆伽羅龍王宮殿。縱廣正等八万由旬。七寶所成。須彌山王。佉低羅山。二山中間。復有難陀優波難陀。二大龍王宮殿。縱廣六千由旬。略說如上。とあり。

餘は大抵本經に同くて。說相は却りて委曲なり。

婆竭龍王は。法華經音義に。娑伽羅亦云。婆竭羅。鹹海名也と見ゆ。名義集もかなじ。

然れば。大海に住とふ意を以て號しなり。龍は摩訶般若經音義に。那伽此譯云龍。或云象。以其大力故。喙焉とあり。

名義集も同じ。行智云く。彼國にても。長を那我と云ハ。本朝と同語なり。然れば。龍を那伽といふも。長き物ゆゑにや。と云へり。然もあるべし。

難陀。跋難陀。二龍ハ。法華經新註に。難陀此云。歡喜。跋此云。善。此二兄弟。二龍王。常護摩提國。雨澤以時。國無飢年。瓶沙王。年爲一會。以報。百姓聞。皆歡喜。從此得名。即目連所降者也。とあり。

名義集も。文句を引て。同說なり。目連が此二龍を降せりと云ふ事實は。増一阿含□品に見ゆて本より妄說なり。其由ハ。佛像初成品に。委しく。辨ふるを見べし。

四阿含を始め。諸經論に。其名高き龍王なるが。皆兄弟二龍なる

由の説なり。

然れど。佛祖が本説は。一龍王にて有しなり。そは上に引く。樓炭經にて知べし。

さて龍を。海底に住む物と云ハ。印度の古説にも有べけれど。此ハ論ひあり。然るハ。物に各々住處あり。丘谷池澤なごころ。龍の住所なれ。海水ハ龍の住所に非ず。然るに彼國籍ごもに。海底をバ。彼が掌る所とせるハ。最古より誤り來れるにて。此ハ海神ハ。和邇神にませバ。彼神の奇しき稜威あること。其狀また官殿の事など且々も見聞傳へて。眞龍とハ錯たりけむ。

其は鱗の類にも種々ありて中には龍にいと能類たるも在れ

はなり。神農本經に。龍と云へる物など是なり故。後には。此を龍とも言へり。李時珍が綱目に。陳藏器曰。鼉形如龍。聲甚可畏。長一丈者。能吐氣成雲。致雨。既。是龍類。時珍案。鼉字象其頭腹足尾之形。故名。と云へり。我が神典に彌尋熊鱓など見ゆて。丈長くいと猛きも有をこめて。和邇とは言へり。印度藏に海龍王と云るハ。其らを見ての説なり。

然れど阿含に。難陀。跋難陀。二龍王。其形最大。繞須彌山七匝。頭猶山頂。尾在海中。など云るは。餘りなる妄誕なり。○また金翅鳥の龍を捉食ふ事此に棲息する十六龍の妄説をも辨られ

たり。
其邊空地有。三十七叢林。各々縱廣五十由旬。過是復有空地。其空地中有。四華池。各々縱廣五十由旬。過是空地有。大海水。去海不遠。

有山名鬱禪山。過此不遠。有山名金壁山。有八万巖窟。八万象王止。此窟中。過此山已。而有雪山。縱廣五百由旬。深五百由旬。東西入海。其邊とは。閻浮樹の邊を云り。三十七叢林。四華池などの事は。本書に。盡く其樹の名。また華の名をも記せれど。煩げれば。其數を計へて。かく約り記しつ。

樓炭經。起世經の趣も。大抵これにおなじ。

過是空地。云々は。起世經に。彼林池の事を説畢りて。其次有海。名烏禪那迦。廣十二由旬。其次有山。名烏禪伽羅。過烏禪伽羅山。有山。名金脇。此山中有八万窟。八万龍象在中。居住。過金脇山。有山。名曰雪山。高五百由旬。廣厚亦爾。彼山四角。有四金峯。挺出各高二十由旬。と云ひ。樓炭經にも。林池の事をいひ終て。過此空地。其空地有海。名鬱禪。從東西流入大海。鬱禪北有山。名鬱禪茄。過鬱禪茄山。復

有山。名須桓那鉢。其山有八万窟。八万象在中。止。過須桓那鉢山。有山。名冬王。高四千里と言へり。大抵本文に同じ。

烏禪那迦。鬱禪茄と云るハ。即鬱禪山を云ひ。金脇。須桓那鉢と云るハ。即金壁山をいひ。冬王山と云るハ。雪山を云へり。さて本書ハ更なり。今引く二經も。此山々の美麗なる趣をも。例の仰山に説記せれど。其はまた例の如く採らず。

然るに立世阿毘曇論に。是閻浮樹外有二林。形如半月。圍繞此樹。内名阿梨勒。外名阿摩勒。阿摩勒林南復有七林。七河一一林。一一河。各々廣五十由旬。東西達海。林河相次。互相間錯。七林七河所覆。七百由旬。最後林南有六大國。其最南國名曰高流。

七林の樹名を盡く擧て。其形狀をも説き。六大國の名も皆有て。其國風。また其國往昔の妄誕故事をも。委しく記せれど。皆

漏しつ。其は皆例の妄説なればなり。

佛爲諸比丘。説是六大國次第因緣。故得知と云ひ。また恒河北有七山。一名周羅迦羅山。高廣一伽浮多半。二名摩訶迦羅山。高廣三伽浮多。三名瞿訶那山。高廣一由旬半。四名修羅婆訶山。高廣三由旬。五名雞羅婆山。高廣六由旬。六名乾駄摩駄山。高廣十二由旬。七名修槃那般婆山。高廣二十由旬。是山於秋月天晴不雨時。最放光明。復有諸人。近雪山住。四月比高平地會。互相招呼。往觀天上。至摩訶迦羅山頂。仰觀北面。遙見彼山。光明照耀。因相謂曰。是須彌山。我今已見天上。

この文に依るときは。周羅伽羅山。摩訶迦羅山などハ。雪山の近きに在る山と聞ゆたり。然れば。此七山の次第ハ。本文また上に引たる文どもの。閻浮樹邊より云る山海林池などの次第

とは異にして。雪山より。北方を云へる次第なり。思ひ給ふべからず。

是修槃那般婆山。北邊。復有大池。長五十由旬。廣十由旬。其山有巖。長五十由旬。廣十由旬。是中殿堂其數不一。象王等之所住處。云々と云るハ。本文また上に引く。二經の説ども甚く異なり。然れど。修槃那般婆山とハ。本文に謂ゆる。金壁山の梵語と聞ゆれば。大旨ハ遠ふことなし。

うハ金壁山を。樓炭經に。須桓那鉢とあるハ同語と聞ゆ。かつ巖ありて。象王の住所と云をも思ふべし。

さて本文に。雪山の東西を。海に入ると云るハ。佛祖この邊の地理をなさりし故なり。然れば其より以北の説も。妄なること准へて知べく。天眼の妄なる事をも辨ふべし。然るに佛國曆象編

に。甚く此、天眼を信として。前節の註に引たる。長脛人の。閻浮樹
を見て。其果子を採、來れりと云。說また此に引く諸人等が。雪山
に近づき。大黒山の頂に至りて。金壁山の光明を見たる。と云る
說をも擧て。今世幸有。精製望遠鏡。齋持以至。蝦夷之北。而從高山
窺。其北。則必當得視。金邊之光明。及閻浮樹之相。若進於蝦夷。至于
北溟而窺之。則益可矣。

以論云。從摩訶迦羅山。得見金邊山。光明。準知其地勢頗高。而北
極出地大率。當及五十餘度。故與蝦夷北邊。其地勢寢應均矣。極
北雖幽渺。若其有光明者。謂可得窺見其事者。據之故也。

不肖若。不得遂此舉者。請海內同志佛子的。窺得是實徵而。聞海內
之感。以宣暢佛乘。則護法莫大焉。想金邊山。距北極也。必不遠矣。而
閻浮樹者。在干極辰之北。千二百由旬也。若夫親得此實徵。則種々

邪說一時冰消。我焉好奇。惟法是荷矣耳。と云るは。實は近世傑出
の護法者と稱ふべし。

爭で疾く。此舉を遂しめて。其年頃の惑を。氷消せしめむ由も
かな。

然は有れど。是より前。論西洋精器。不足憑といふ條ありて。望
遠鏡を始め。其餘の諸精器を。盡く廢せる。今その望遠鏡を齋
持して。金邊山の光明。また閻浮樹を窺はむと希へる。如何ぞ
や。然るハ彼望遠鏡をもて。其山其樹を窺ひ得べくハ。日月星辰
の遠近大小をも窺ひ得べき物をや。

風は聞く此菩薩今ハ七十に垂むとすとか。然らハ曆象編を
作れる頃は。稍耄して在けるか。最も心得がたき事なり。

此菩薩口を開けハ。極めて世の天學家を愚弄し彼天眼を言揚

て。測量家の世眼を。冒誹せる中。吾法有天眼神鏡等神通以見。其實者之外。出於臆想情量者。敢弗取也。加教而解。如解而行。如行而證。六通無礙。無毫所惑。是名真智道之人。遠見。万劫之前。猶如今日。其見。万劫之後。亦然。而不爲山壁所障。徹視無窮。天地猶如。手掌。非如是人之言。不足爲據也。碌々庸人。不自揣其分。測荒唐之事。筆以惑人。輕窳之士。競騁焉。苟存意於道者。豈不務而關乎哉。など云ひ。

是また文を甚く切めて抄せり。曆象編全部五卷。數百葉なるも。大抵ハ。此類なる大言にて。其要たる所ハ。僅に二三十葉にハ過ぎるべし。其數十葉も。悉く非説なること。下に次々論ふを見て知べし。

殊に眼智と云ふ篇をも立て。諸經論を牽き。天眼と肉眼との差

別を。甚言痛く説たり。世の測量生ら。其を見て。口惜けには見ゆる物から。少か天説をのみ論じ。佛經論の博大なる由に聞悻して。其天眼を。何なる眼とも得探ねず。鼻を嚙りて黙居るを。傍より見るに堪ねハ。今一彈指して。其天眼をうち潰してむ。其ハ先づ上に云。如く。天眼と云。こと。佛祖が時より。遙前なりし。古梵志の。大仙人と成れる倫ハ。彼梵天子を出て。未遠からざる故に。然る天眼を得たるも在。つと聞ゆれど。

此ハ我が神世の神達に。奇異なる態の種々有し。が。神世を遇て。人の世となりても。なほ上古の人には。今人の思議すべからぬ。靈異の有けるに。准へても辨ふべし。

佛祖の天眼を得たり。と云は妄誕にて。其在世中に天眼を得つる様に示せし事ども。總て幻法をもて。然は際たるにて。實の

天眼をバ不得しなり。其由いと近き一事をもて論さむに。大毘婆沙論に。契經說。若胎是男。依母右脇向背蹲坐。若胎是女。依母左脇向腹蹲坐。得天眼者觀此差別。依經而記と云へる說あり。

此ハ第四十七卷の二葉に見ゆたり。此論に。契經說。經說など云へるは。皆佛祖が眞說經を云へり。文義は。佛の天眼を以て觀たる說に。男子の母胎に在るときハ。其背に向ひ。右脇に倚て。蹲まり坐し。女子の母胎に在るときは。其腹に向ひ。左脇に倚て。蹲まり坐す。天眼を得ずてハ。此差別を觀こと能はず。此ハ浮たる說には非ず。如來の眞經に依て云ふ說ぞと云へる意なり。

今案ずるに。此天眼說甚く違へり。其ハ人子の母胎内に在るとき。男にまれ女にまれ。蹲坐する物に非ず。頭を下に向けて。逆さまに屈み在る物なり。此ハ皇朝の先哲。及び西洋の古賢等また我か黨の者も。正しく其實を檢して。知定たる說なるが。其は有識の人耳ならず。赤子を揚る老愚嫗までも。今ハ甚能く知れる事なり。

皇國西洋既に然る上ハ。印度の胎子。また豈然さらむや。此ハ人子のみならず。草木の實も。また其理を一にして。其仁の核中に在をみれば。其根ハ反りて。上に向たり。何國の草木か然らざらむ。然れば。何國の胎兒か然らざらむ。熟思ふべし。

世の愚老婦すら。能く知れる。僅々たる胎兒の容をだに。得視ざる眼を以て。争か天地世界を徹視する事を得む。然れば。是一事を以て。佛祖が天眼說の。總て妄なる事を。まづ辨べし。然るを碌々たる菩薩が。其天眼說を首張して。其を眞の知道

と稱し。漫に荒唐の大言を放ちて。衆を惑さむと欲るを。苟くも道に意を存する者の。豈務めて是を闢かさらめや。

なほ上に引く。菩薩が說中に。佛祖が神道を稱して。遠見万劫之前。猶如今日。其見万劫之後。亦然と云る。若此說の如くは。今此印度藏志を撰ぶこと。佛祖始めて。佛法を唱へしより以來。今の道に。斯ばかりの大厄は有ること無れば。何も後三千年の期に當りて。我が道法に。さる厄有りとは言遺さりけむ。此懸記の無き上は。万劫の後を見こと。猶今日の如しと云。說も立がたし。是說立ざる上は。遠く万劫の前を見こと。猶今日の如しと云ふは。殊に妄說なること言ふも更なり。

此次に佛祖が阿耨達池といふが。雪山の頂き在て。其に棲る龍王には。三熱の苦なしとも。其池の近傍なる。牛馬象獅子に

欠

MISSING

象るといふ山を直に生畜に取成て其口々より四河を吐流
と。幻説せるより種々の妖説の起り。うを雪山。また崑崙に在
しと云も誤にて。三の在所。皆異なる事。又印度支那といふも。
元河名より負たる國號なること。波斯拂林に流入る河を縛
又河と云に比て知るべき由。また毘舍離城。及象王の事をも。
委く説れたるを。今は略きつ。

此四天下有八千天下。圍遶其外。復有大海水。周匝圍繞八千天下。
復有大金剛山。遶大海水。金剛山外。復有第二大金剛山。二山中間
窈々冥々。日月神天。有大威力。不能以光照。及於彼。有八大地獄。一
名想。二名黑繩。三名堆砌。四名叫喚。五名大叫喚。六名燒炙。七名大
燒炙。八名無間。一々地獄有十六。小地獄。小獄縱廣各々五百由旬。
起世經に。其四大洲。及八万小洲。諸餘大山。及須彌山王等。外別有。

一山。復名。斫迦羅。

前代舊譯云。鐵圍山。

高六百八十万由旬。縱廣亦同。彌密牢固金剛所成。此輪圓山外。更有。一重。大輪圓山。高廣正等如前。由旬。其兩山間。極大黑闇。無有光明。日月有如是。大威神力。不能照彼。使見光明於兩山間。有八大地獄。何等爲八。所謂活地獄。黑地獄。衆合地獄。叫喚地獄。大。叫喚地獄。熱惱地獄。大熱惱地獄。阿毘脂地獄。此八大地獄。各々復有。十六小地獄。周匝圍繞而爲眷屬。是十六獄。悉皆縱廣五百由旬とあり。本文二經。互に獄名の異あるは譯の異れと。梵語の轉訛と有るを以てなり。

さて本文。また此經等に依るときは。彼九山八海四天下。および八千天下を周匝圍遶せる。大海水の外に。そを圍遶する。大金剛山。

二重にある由の佛説なり。

然らば前の九山八海に。四大洲外なる一大海。また此二山を入れて。十一山九海なり。須彌山を除ては。十山九海と云べし。然るを立世論。俱舍論を始め。四大洲を圍繞する大海水の外に。一鐵圍山を置て。凡て九山八海とせるは。佛説と違へり。古今の比丘ら。皆その論説に依たれど。阿含は本經なり。諸論は未なり。豈本を捨て。未を取らむや。

斯て其二の。大金剛山の中間なる。竊々冥々の處に。八大地獄。および其八獄に。各々十六づゝの小獄。部てある由なれば。總ては百三十六地獄なり。

大般涅槃經に。地獄一百三十六所とある。其音義に。八地獄。是根本。各有十六。以爲眷屬。合成一百三十六也。と云るが如し。

地獄は攝大乘論音義に。那落迦梵語也。亦言那羅柯。亦云泥羅夜。舊言泥羅耶。斯梵言楚夏耳。此譯有四義。一不樂。二不救。三闇冥。四地獄。經中言地獄者。一義也と云ひ。

また法苑珠琳に。地者底也。獄者局也。梵名泥犁耶。舊翻狹處。局不攝地空。梵本正音那落迦。或云捺落迦。新婆沙論云。諸有情無悅無愛無味無利無喜樂。故名那落迦。捺落名。人迦名。爲惡惡人生。彼處故と見ゆ。六波羅密多經音義には。捺落迦梵語。地獄之總名也。とも云へり。

大般若經音義に。經言地獄者。冥司幽繫之所也。在世界之下。故云地獄。案俱舍論頌云。此下過二万無間。深廣同上。七捺落迦。此皆大地獄也とあり。

また名義集に。那落迦。此翻惡者。輔行云。地獄從義立名。謂地下

之獄。故名爲地獄。婆沙云。瞻部洲下。過五百踰繕那。乃有其獄。とも云へり。

さて此八大地獄。また百二十八小地獄の名を。しか號たる由縁。また其大苦痛の趣など。右の經等に。地獄品として。餘品より殊に長き品々あり。文繁く煩しければ。都て註さず。

其大凡は。次節に引く鐵城泥犁經の趣に準へても悟りぬかし。

さて上に出たる四天下に。八千の天下ありて。其外を圍遶すと云るは。嶋々を云る物かと思ふも有べけれど。是また妄誕なり。故說法ごとく口合ず。此にかく八千と云かと思へば。下に擧る火災の所には。四天下及八万天下と云へり。是口に出るまゝの謾語なればなり。

○
彼二山中間復有十地獄一名厚雲二名無雲三名呵々四名奈何五名羊鳴六名須乾提七名優鉢羅八名拘物頭九名芬陀利十名鉢頭摩其獄罪人自然生身譬如厚雲故其獄罪人自然生身猶如股肉故其獄罪人苦痛切身皆稱呵々故其獄罪人苦痛酸切無所歸依皆稱奈何故其獄罪人苦痛切身欲舉聲諸舌不能轉直故其獄罪人皆黑如須乾提華故其獄罪人皆青如優鉢羅華故其獄罪人皆紅如拘物頭華故其獄罪人皆白如芬陀利華故其獄罪人皆赤如鉢頭摩華故噲有六十四斛胡麻有人百歲持一麻去如是至盡厚雲地獄受罪未竟無雲壽厚雲二十倍呵々壽無雲二十倍奈何壽呵々二十倍羊鳴壽奈何二十倍須乾陀壽羊鳴二十倍優鉢羅壽須乾陀二十倍拘物頭壽優鉢羅二十倍芬陀利壽拘物頭二十倍鉢頭摩壽拘物頭二十倍是各一中

劫二十中劫名一大劫瞿波梨比丘謗舍利弗目犍連墮此紅蓮地獄中

起世經云彼世界中間別有十地獄何等爲十一頰浮陀二泥羅淨三阿呼四呼々婆五阿吒々六搔捷提迦七優鉢羅八波頭摩九奔茶黎十拘牟陀此獄衆生身形如泡沫也此獄衆生身形如肉段也此獄衆生受嚴切苦逼迫之時叫喚而言阿呼阿呼也此獄衆生極若逼時叫喚而言呼々婆呼々婆也此獄衆生苦惱逼時但得言阿吒々阿吒々然其舌聲不能出口也此獄中之猛火焰色如此華也此獄中之猛火焰色如此華也此獄中之猛火焰色如此華也此獄中之猛火焰色如此華也此獄中之猛火焰色如此華也云々とあり

十地獄の次第も本と互に異りかつ本文には其罪人の色を

其華どもに如たりと云ひ。樓炭經もしか言るを。起世經は。火焰の色。うの華どもの色に如たりとせり。此は道理に叶ひて聞ゆるを。本文と樓炭は道理に當らず聞ゆれども。これぞ古色なるべく覺ゆ。偕また樓炭經は。此十地獄の在處。本文また起世經と異にして是を閻羅王界の地獄と爲たり。其文は下に引くを見るべし。

さて立世論地動品に。佛說比丘有大地獄名曰黑闇。各々世界外邊悉有。皆無覆蓋。此中衆生自舉其手。眼不能見。雖復日月具大威神。所有光明不照彼色。黑闇地獄住在何處。兩々世界。錢輪外邊。名曰界外。是寒地獄。一名頰浮陀。二名涅浮陀。三名阿波々。四名阿吒々。五名嚙吼々。六名鬱波縷。七名拘物頭。八名蘇健陀固。九名分陀利固。十名波頭摩。云々と言ひ。また此を寒氷地獄とも云て。下文

に其寒氷なる趣を説たり。其在處は更なり。上の經等に。焰熱なる由云るとは。甚く異なる説相なり。

然してまた地獄品に。別なる十地獄の名を擧たる第八までは前節の八大地獄なるが。第九を外國隔といひ。第十を閻羅地獄と云ふ由よて。其事相を長々と記せるを見るに。第九外國地獄と云は。八大地獄に各々十六づゝ圍繞せる小地獄なる由を記し。第十。閻羅地獄といふの説相を見れば。下に引く鐵城泥犁經を取りて。仰山に加説せるにて。前後うち合さる説等を多く記載たるにぞ有ける。

然るをまた。龍樹論師が大論に。前節の八大地獄を。八熱獄と立て。此なる地獄の二を減じて。八寒氷獄者一名頰浮陀。二名尼羅浮陀。三名阿羅々。四名阿婆々。五名喉々。六名漚波羅。七名波頭摩。

八名。波頭摩。と云ひて。寒苦の状もて説たるは。立世論に依れる説なれど。二獄を減ぜる意は詳ならず。

閻浮提。南。大。金剛山。内。有。閻羅王宮。縱廣六千由旬。其城七重。七重。欄楯。七重。羅網。七重。行樹。周匝校飾。七寶所成。

大樓炭經に。佛言。大鐵圍山。外。閻浮利天下。南。有。閻羅王城。縱廣二十四万里。以七寶作云々。

二十四万里は。本文の六千由旬を。唐土の里法に直せるなり。山外は。決めて山内の誤なり。

起世經に。彼。内輪圓。大輪圓。二山。中間。外。閻浮提。南。有。閻摩王宮殿。縱廣正等六千由旬。七寶所成。於其四方各有諸門。一々諸門皆有。却敵樓云々とあり。

三經ともに。例の節文を畧して擧ぐることも毎もいふが如し。

閻羅王の事は。俱舍論音義に。琰摩。或作琰摩羅。或言閻羅。亦作閻摩羅社。又言夜磨盧迦。皆是梵音。楚夏也。此譯云縛。或言雙世。竊謂。若樂竝受。故以名焉。

五天使者經音義も。此に同じ。苦樂並受としも云るは。下の本文に擧る佛説に。此王五欲の歡樂は受つゝも。晝夜に三熱の苦惱を受く。と云る意を得て云る説なり。

又云。閻摩。此云雙。羅社。此云王。兄及妹皆作地獄王。兄治男事。妹治女事。故曰雙王也。

閻摩羅經音義も。同説にて。鬼官之總司也と云へり。印度にても。古く男に對して。女を姉妹と云ること。阿含を始め。籍等に見ゆれば。此妹は后を云ならむ。大毘盧舍那經住心品に。閻摩天。閻摩后とあり。

大般若經音義。琰魔王梵語冥司鬼王名也。舊云閻羅王。經文作
剋魔。皆訛畧不正也。

剋尸染反

正梵音云琰摩。

閻奄反

古人譯爲平等。といひ。また焔魔梵語鬼趣王也。經文作剋魔訛略
不正也。

剋音揚染反。

梵音焔摩。義翻爲平等王。此司典生死罪福之業。主守地獄八熱八
寒及小地獄。役使鬼卒。於五趣之中。追攝罪人。捶拷治罰。決斷善惡。
更無休息故。三啓經云。將付琰摩王。隨業而受報。勝因生善道。惡業
墮泥犁。即其事也。とも言へり。

また名義集よハ。琰魔或云琰羅。此翻靜息。能靜息造惡者。不善
業。故とも見ゆたり。

さて此王のこと。金七十論よ。八分の生處といふ事を説る所よ。
一梵王生。二天帝生。三世主生。四乾闥婆生。五閻摩羅生。六夜叉生。
七羅殺生。八沙神生と云ひ。

閻摩羅生を一所よハ。阿修羅生とあり。此ハ由緒ある事なり
下よ論ふを見べし。

また臨退死時。作如是計。獄卒縛我就閻王所。因此計生。苦不及得
聽僧法義。故名盲闇とも有り。

金七十論ハ。迦毘羅仙が説を集記せる物よ。僧法義とハ。即
其法を云へり。故この文章ハ。此世よて罪を犯せる者ハ。退死
の時よ臨みて。冥府より獄卒來りて。その識神を縛して。閻王

の所に就しむ。と云ふ古説を信じて。しか思計する故に。我僧
法の義を聽得るに及はず。是をもて然る輩をば。盲闇の人と
名くと。古説をいひ腐せる文意なり。

此等の説を。上に引く音義どもに。冥司王。鬼趣王。鬼官。總司など
云ひ。生死罪福の業を司典して其善惡を決斷する由言るに合
せ考ふれば。大古より梵志の古説に傳はる神王なること。炳焉
なり

上の音義どもに。佛説に見ざる説ども。多かるは。梵志に傳
はる古説の。諸書に散見せるを據ひて。記せればなり。總て音
義は更なり。他の佛書どもにも。佛經に見ゆる梵語の見ゆ
るは。皆ろの類と知るべし。

故かの十二天餓飢にも。此王の名を標出して。焰摩天喜時。人無

横死。疫氣不發。此天隕時。人非時死。疫氣充滿と云ひ。

文意は。此王は。鬼神の總司なれば。此をよく祭る時は。此王喜
びて殊によく鬼神を司典して。疫氣をも發さしめざるを。能
く其祭を爲さる時は。隕りて鬼神らが。疫氣を行ふをも制せ
ず。非時に。人の横死すること多し。と云るにて皇朝の眞の道
にも符へる。最も古意なる説なりかし。

また其供養の所に。焰摩天與諸五道冥官。太山府君。司命。行疫神。
諸餓鬼等。來入壇場。同時受供。と言ひ。祈願の所には。若欲除疫。用
焰摩天。とも云へり。

諸五道冥官とある五道は。地獄。畜生。餓鬼。修羅。諸天の五道を
云ひ。某々の冥官をも帥うる由なり。冥司の總王と云へば。然
も有べし。但し此は舊よりの印度説なれど。太山府君。司命と

云るハ。印度説ならず。漢説なるに。入たるハ。此軌の譯者不空三藏が加筆なり。然れども。此等を加たるも意は違ハざるなり。其ハ太山府君。司命神など云ふハ。西戎國にて。幽冥の事を行ふ神と立たる物なればなり。其由を委しく云むは。説長ければ。此にハ漏しつ。故是を以て。佛祖やがて其古説を襲ひ取りて。閻羅王界の事をバ説るなり。

古今の文盲學者ども。此王の事。また地獄の事など。其説のよりに起れる本を知らず。少か佛籍の片端をのぞき見て。摠て佛祖が妄誕なりと論ふハ愚昧なり。然れども。其は佛祖が常に。妄誕の辭を持つ故に。偶に眞説の交れるをも推こめて。然は云るゝなり。

さて此界の事を。また鬼道とも鬼趣とも云り。其はまづ立世論云何品に。云何。鬼道名。閃多。閻摩羅王名。閃多。故。其生與王同類。故名。閃多。復説。此道與餘道往還。善惡相通。故名。閃多。と言ひ。名義集に閃多此云。鬼とあり。

大毘婆沙論に。云何。鬼趣名。閉戾多。答。施設論説。如今時。鬼世界王名。琰摩。劫初時。有。鬼世界王名。毗多。是故。往。彼。生。彼。諸。有情類。皆名。閉戾多。即是。毗多界中所。有。義。有。説。由。造。作。増。長。増。上。慳。貪。身。語。意。惡。行。往。彼。生。彼。令。彼。生。相。續。故。名。鬼。趣。と云へり。なほ異説を多く擧たれど。煩はしければ。抄し出す。

世間。有。三。使。者。一。者。老。二。者。病。三。者。死。也。有。衆。生。身。行。惡。口。言。惡。心。念。惡。身。壞。命。終。墮。地。獄。中。獄。卒。將。此。罪。人。詣。閻。羅。王。所。白。言。此。是。天。使。所。召。也。唯。願。大。王。善。問。其。辭。王。問。罪。人。言。汝。不。見。初。使。耶。罪。人。報。

言。我不見也。王復告曰。汝在人中時。見老人耶。罪人言。見。王言。汝何不自念。我亦當爾。彼人言。我時放逸。不自覺知。王言。汝放逸不能收。惡從善。今當令汝知。放逸苦。又告言。汝不見第二天使耶。對曰。不見。王言。汝在人中時。見病人耶。罪人言。見。王言。汝何不自念。我亦當爾。彼人言。我時放逸。不自覺知。王言。汝放逸不能改惡。從善。今當令汝知。放逸苦。又告言。汝不見第三天使耶。對曰。不見。王言。汝在人中時。見死人耶。罪人言。見。王言。汝何不自念。我亦當死。彼人言。我時放逸。不自覺知。王言。汝放逸不能改惡。從善。今當令汝知。放逸苦。時閻羅王以三天使。具詰問已。卽付獄卒。時彼獄卒。卽將罪人詣大地獄。其大地獄。縱廣百由旬。下深百由旬。起世經云。佛告諸比丘。世間凡有三使者。何等爲三。老病死也。世間之人。以自放逸。身口意惡。其人命終。趣於惡道。生地獄中。其守獄者。

驅彼衆生。卽時將至閻摩王前。白言。天王。此等衆生。昔在人間。縱逸自在。恣自口意。行於惡行。其惡行故。今來生此。天王善教示之。好訶責之。時閻摩王問罪人言。汝善大夫。昔在人間。見初天使善教示汝。好訶責汝。不耶。答言。大天。我實不見。時閻摩王復更告言。汝昔在世間時。豈不見婦女大夫之衰老耶。其人答言。大夫。我實見之。王言。汝愚癡人。昔日旣見。是相云何。我亦不離。是法於身口意。不作善業。其人答言。我實不作。如是。思惟。王言。若如是者。汝自懈怠。行放逸。不修身口意善業也。以是因。汝當長夜得大苦惱。是汝自作。聚集故。得此報也。云々。

此間は。二使三使をもて。訶責教示する趣。本文の如く。病と死となり。然しも異。みと無れば。約めたり。なほ本文および。其餘の經等にも。尤病死の躰相をいと精細に説述たれど。此は人

の普ねく知る事なるよ。その文の繁きが煩はしければ。本文よも。唯よ老人病人死人とのみ約め記せり。

時。閻摩王。以三使者。教示詞責訖。即棄捨之。即勅令將去。時守獄者。即執罪人。手臂。以頭向下。以足向上。遙擲置於地獄中。と云へり。本經と。互に精麁は有れど。三使者間の事は違はず。然るよ大樓炭經は。五問よて。其を使者など云ず。是ぞ古色なるべく所思たる。樓炭經は。阿含よりも却りて古鉢なること。上よも下よも往々論ふを合せ考へて知べし。

其は本經また。起世經こそ三問なれ。閻摩王經。泥犁經。増一阿含なども。皆五問なるは。是古説なる事を辨ふべし。

然るよ。本經また起世經よ。其二問を除きて。三問とせるハ因あり。其は下よ云を見べし。

其經等の中よ。閻摩經。泥犁經の二部は。ことよ古色を存せるは。疑なく。古梵志らよ傳來せる古説なるを。竊よ盜みて。佛説よ託せるにぞ有ける。

佛經どもよ。元より梵志よ傳來せる古説を竊みて。佛説よ託せるが多かること。上よも下よも。數所よ論ふを見辨ふべし。閻摩王經を。具よハ閻摩王五天使者經といふ。宋三藏法師慧簡譯。とありて。三紙半ならでハなし。泥犁經は。鐵城泥犁經といふ。東晋沙門竺曇無蘭譯よて。五紙半あり。此二經の中よも。泥犁經ハ。殊よ古鉢なる物なり。具眼の人ハ。披見て知べし。猶此經の古書なる證ハ。下よ云を見べし。

故。今二經の撓入文。また重複せる文を去り。併せて此よ標出して。其古説を著さは。凡人於世間。身行惡。口言惡。心念惡。見邪行。邪。

其人壽終。墮惡道。或入泥犁。人身行善。口言善。心念善。見正行正。其人壽終。生天上。或生人間。譬如雨泡。天雨滴而一泡興。一泡滅。世間人死。識神出生。亦復如是。

增一阿含善聚品なる。閻羅王五問説は正に此説を取れるなるが。惡道と云に。餓鬼道。畜生道を當たり。

在世間。人不孝。父母不畏。帝王不學。經戒不事。道人。不敬長老。不施貧窮。不畏後世。不隨仁義。無可用心。如是。人死。其魂神即墮泥犁中。道人を中阿含に。梵志といひ。樓炭經には。婆羅門とも。道人とも有り。但し右の經々に。不事沙門道人。とある沙門は。例の摠入文なれば。除きたり。

泥犁卒名曰。旁々即將行。至閻羅王所。轉白王言。此人非法。當有所見。惟大王處。此人過罪。時閻羅王即呼其人。前對問。言。汝於世間。不念父母。養育推燥居濕。乳哺長大之恩。何以不孝父母。其人答言。我實闇愚不知。故耳。閻羅王言。汝處罪者。非父母君天師長道人過也。汝自所作。今當受之。是第一問。

此事。增一中。二阿含にも。第一問なれど。大樓炭經は。却りて第四問にあり。

王復問。言。汝於世間。不見男子。女人。病困時。羸劣甚極。手足不任。衆醫不能治者耶。其人答言。我實見之。閻王復言。汝謂獨可得。不病耶。凡人已生。法皆當病。其強健時。何自放恣。其人答言。闇愚故耳。閻羅王言。汝以愚痴。自處其罪。非父母君天師長道人過也。汝自所作。今當受之。是第二問。

此事。增一中。二阿含。閻羅王經とも。第三問にあり。今ハ泥犁經によれり。

王復問言。汝於世間。不見男子女人。年老時。髮白齒墜。羸瘦僂步。起居持杖者耶。其人答言。我實見之。閻王復言。汝謂獨可不老耶。凡人已生法。皆當老。其彊壯時。何自放恣。其人答言。愚暗故耳。閻羅王言。汝以愚痴。自處其罪。非父母君天師長道人過也。汝自所作。今當受之。是第三問。

此事增一。中。二阿含とも。第二問あり。閻羅王經ハ。第三問あり。

王復問言。汝於世間。不見男子女人。諸死亡者。或藏其屍。或棄捐之。一日二日至七日。肌肉壞敗。狐狸百鳥蟻蟲。皆就食之耶。其人答言。我實見之。閻王復言。汝謂獨可不死耶。凡人已生法。皆當死。其在世時。何自放恣。其人答言。愚暗故耳。閻羅王言。汝以愚痴。自處其罪。非父母君天師長道人過也。汝自所作。今當受之。是第四問。

此事諸經みな第四問あり。

王復問言。汝於世間。不見弊人惡子。爲吏所捕。案罪所應。刑法加之。或斷手足。或削鼻耳。剗刻肌膚。熱沙沸膏。燒灌其形。裹蘊火燎。懸頭目炙。屠割支解。毒痛慘拜耶。其人答言。我實見之。閻王復言。汝謂爲惡。獨可得解耶。唯眼見世間。罪福分明。汝在世時。何不守善勅。自放恣耶。其人答言。愚暗故耳。閻羅王言。汝自用心。作不忠正。非父母君天師長道人過也。今是殃罪。要當自受。豈得以不樂故。止耶。是爲閻王忠正之教。第五問。

閻羅王經ハ。是より以下を闕ナリ。故是より末ハ。泥犁經のみ依れり。

前對已畢。泥犁旁即牽持去。詣第一鐵城。云々とあり。

この云々と約めたる文ハ。下より引く八地獄の説。すなはち是

なり。

然れば梵志の古説ハ五問なるを第一第五ハ佛祖が謂ゆる世
事諦なる故也。此二問ハ除きて其要旨たる老病死の三問ハ約
し。其を天使など號けて我が立法ハ附會せるを本經ハ其説を
用ゐる。起世經ハ其を委曲し。大樓炭經ハ本より五問の説を用
ゐて。天使者など云す。増一。中の二阿含ハ五問の古説ハ用つ
ゝも。天使者と云語をバ用ゐて。是また其説を委曲せるよぞ有
ける。

然るば五問の古説世ハ普ねく聞ゆて有し故也。五問の説な
る經々を記せる徒。ざる佛意をバ得しも悟らず。有來し儘を
取用ゐる。佛意を附會しつゝ。己が向々作傳たるなり。故是をも
て。使者と云るも。云ざるも有なり。誠ハ諸經盡く佛祖が説る

其儘を。阿難が結集して。記し傳たる物ならまし。假令説
法の精粗はありとも。斯の如き相違の有べくも非ず。見高か
らむ人ハ少しく思ふべし。

さて本文ハ時彼獄卒。即將罪人詣大地獄。其大地獄云々とある。
大地獄ハ閻羅王の司る地獄にして。上なる大小の地獄等とハ
別なり。然るを此ハ唯かく言へるのみよて其事相を載さず。起
世經ハ此獄の別ハ有る由をさへハ載さねど。大樓炭經ハ閻
羅王界の所に其界有十六泥犁。一名阿浮。二名尼羅浮。三名阿呵
不。四名阿波浮。五名阿羅留。六名優鉢。七名修捷。八名蓮華。九名拘
文。十名分陀利と有りて。其事相をも畧載せり。

なほ此。前文ハ其泥犁城。廣長各四万里。窈々冥々。四方有四門。
諸角治甚堅。垣壁以鐵作。上亦有鐵覆。其地悉布鐵。火悉自然出。

ともあり。増一。中の二阿含も此界の地獄を擧て。四門鐵城の大地獄など云るが其説相ハ甚く腐々し。

然レハ是本色なりしき。長阿含の世記經ハ。上に云、如く。樓炭よりも後なる故に。此界より取りて。二鐵圍山の中間に移せるが。過ちて此に。其大地獄縱廣百由旬。下深百由旬と云文をハ。削り残せるを。起世經は。また其後よ成れる故よ。此文をも皆削り去たり。其ハ樓炭經なる。此界の十大泥犁の名と。世記經。起世經なる。彼處の十大地獄の名と。同きを以て辨ふべし。

互よ少づゝ語の轉訛ある故よ。其とも有らぬ如く見ゆめれど能く校見よ。もばら同じ地獄なるをや。偕ころ樓炭よ。彼處の八大地獄の事ハ。記せれど。十六地獄の事ハ。彼處よ記さず。是を以ても。樓炭ハ古く。世記經ハ其次よ成り。起世經ハまた

其後よ成れる事をし辨ふべし。

斯てその樓炭經よ。しか説たるハ彼泥犁經の古説を取れるよぞ有ける然るハ彼經よ。閻羅王五問の事を記し畢て。其連次の文よ。泥犁旁即牽去將詣第一鐵城。名阿鼻摩城。有四門。周匝四千里。中有大釜。長四十里。中皆有火。人遙見之。恐怖戰慄。泥犁旁。劍刺人。内之。數千万人。門皆閉。晝夜不得出。人在其中。數千万歲。火亦不滅。人亦不死。久々遙見東門自開。人皆欲出。走到其門。々後自閉。欲出諸人。於門中共起。大鬪諍。久々復遙見西門開。諸人皆走往門。復閉。復於門中共大鬪諍。久々復遙見南門開。諸人皆走往門。復閉。復於門中共大鬪諍。久々四門皆復自開。人得出。自以爲解脱。

増一阿含。中阿含よ。一地獄なるは。即この地獄よて。中阿含よハ。此を四門大地獄といひ。二經共よ此獄の苦相よ。今引くハ

地獄の苦惱をみな現はし。なほ仰山に説たるが中。増一。地獄左側。極爲火熱。鐵城鐵郭。地亦鑿作。有四城門。極爲臭處。似所染尿溺。とも云へり。

復入第二泥犁。人足著地。即焦。舉足肉復生。有東走者。西走者。南走者。北走者。周匝地火熱。數千萬歲。乃竟自以爲得脫。

此第二地獄の名を。本書に鳩延泥犁とあり。

復入第三泥犁。其中有蟲名。囉。喙。如鐵。黑頭足。蟲遙見人。皆匝來啄。人肌骨皆盡。如是數千萬歲。乃竟得出。人自以爲得脫。

此第三地獄の名を。本書に彌離摩得泥犁とあり。

復入第四泥犁。其中有山石。利如刀。人皆走上其巔。復有走下者。向足皆截。地皆如利刀。如是數千萬歲。乃竟得出。人自以爲得脫。

此第四地獄の名を。本書に芻羅多泥犁とあり。餘の經々には。

皆その石の利を直に刀。または劍と云るを。此經のみ如刀と云ひ。如利刀。など云るは古色なり。

復入第五泥犁。其中有熱風。相逢避之。不能得脫。其人求死。不能得死。求生不能得生。如是久々數千萬歲。乃竟得出。人自以爲得脫。

此第五地獄の名を。本書に阿夷波多桓泥犁とあり。

復入第六泥犁。其中多樹木。皆有刺。樹間有鬼。人入其中者。鬼頭上出火。口中出火。身爲十六刺。遙見人來。大怒。火皆見。十六刺皆貫人身。身裂。如食之。走欲得脫。走常觸此鬼。如是數千萬歲。乃竟得出。人自以爲得脫。

この第六地獄の名を。阿嚙操波犁桓泥犁とあり。

復入第七泥犁。其中有蟲名。鶉。人入其中者。是蟲飛來。入人口中。食人身。人皆走。極蟲食。不置。人皆四面走。欲求脫。不能得脫。如是數

千萬歲。乃竟得出。人自以爲得脫。

此第七地獄の名を。本書に。樂徒務泥犁とあり。

復入第八地獄。其中有流水。人皆墮水中。水邊有荆棘。水熱過於世間。湯鑊熱沸踊躍。人皆熟爛走欲上岸。邊有鬼持矛逆刺人。復入其中。不能得出。入皆隨水下流。復有鬼激如鉤。取問之言。從何所來。其人言。我不知。從何所來。我但饑渴欲飲食。鬼言。我與即取鉤。挖開其口。因取消銅。注入口中。皆焦爛求死。不能得死。求生不能得生。諸泥犁中人。皆復得出。自以爲得脫。

この第八地獄の名を。本書に。墮檀羅泥淪泥犁とあり。

反入第七泥犁。次第還入第一阿鼻摩泥犁。時來至人遙見鐵城。皆大歡喜。呼稱萬歲。閻王聞之。問泥犁旁。是何等聲。泥犁旁言。是呼聲者。是前過泥犁中者也。閻羅王言。是皆不孝父母。不畏天命。不畏帝

王。不畏禁戒。不承事道人者。即復呼其衆人。教示之言。今汝解脫。去復爲人子。當端身端口端心。一對畢。乃皆得出。在城外地。諸死者。先世爲人時。作惡猶有小善。出泥犁已後。生善道人。從泥犁中出。各自正心正口正行。不復還入泥犁中。泥犁中亦不呼人。各自思惟。復可爲善。人死入泥犁者。侯王道。人乃得與閻羅相見耳。凡餘人。但隨群入。閻羅地獄王名也。とあり。

俱舍論に。大自在天。作大功力。生世間。又生地獄。とあるハ古傳と聞ゆたり。

阿含起世。その餘の經等に記せる。地獄の趣より事少く甚古色なるハ。元より此ハ。梵志に傳はる古説にて。總て泥犁説の祖經なるガ故なり。其ハ何を以て知なれば。其事實の簡古なるハ更にも言ず。雜阿含經に。加の阿育王ガ。始め佛法を知らず。兇惡を

りし時に。地獄經。及び五天使經等を案じて。地獄の狀を作れる事あり。

此事委しくハ。第□品に載するを見て知べし。

地獄經とは。即この泥犁經を云ひ。五天使經とは即上に引く。閻羅王五天使者經と聞ゆるを以て是を知れり。

泥犁はすなはち地獄の梵語なれば。地獄經と云に同じ。

阿育王が時は。佛滅より百十六年後なれど。佛説の經はいまだ記載なき間なるに。此二經の既に有しハ。梵志の古説なるが故なり。

此王が時頃ハ。いまだ佛説の經無ししこと。此も第□品に委しく辨ふるを見るべし。大毘婆沙論百七十二卷にも。此經の事見たり。

さて地獄の在所は。大毘婆沙論に。大地下に其獄あり。地下の獄なる故に。地獄と云よし言るが。本古の説にて。其事相ハ大かた泥犁經に記せる如く。なほ簡に傳コトシテけむを。佛祖その説を用ゐて。樓炭經なる。十大地獄の説法し。後には其在所を。二鐵圍山の間に移し。また別に八大地獄。百二十八小地獄の説をも作り。その事相苦相を。なほ仰山に妄説せるを。比丘ども次々に傳聞しめて來けるに。彼本故の説は。いと早く世に弘まりて有れば。後に諸經論を記せる徒。彼も此も捨がてに載しつゝ。互に異同重複せる説等の多く出來たるにぞ有ける。

然るになほ。後世和漢の比丘ら。彼をも此をも如來の金口説法と。ひたふるに尊奉しつゝ。有けるは隣れむべし。

印度藏志略二之卷終

印度藏志略二之卷正誤

一欄外ニ○ヲ記シタル處ハ一ノ卷(一枚裏ナド四十)ノ如ク二號活字ニテ一字下ゲニスベキヲ誤リタルナリ

一欄外ニ◎ヲ記シタル處(十枚表)ハ二號活字ニテ低頭ス可キ(俗一ノ卷一枚裏印度國)ヲ誤リタルナリ

一四十一枚ヨリ四十三枚ニ續ケルハ四十二枚一葉落丁シタルニハアラズ全クハ四十三枚ヲ四十二枚トシ四十四枚ヲ四十三枚トシ以下順次斯ノ如ク一丁ヅ、繰リ上グ可キヲ誤植シタルナリ

葉數	行數	誤脱	訂正
一裏	一	墜胎	墜胎
一表	一	優僂迦	憂僂迦

全 三 三 四 四 全 全 全 五 全 六
裏 表 裏 裏 裏 裏 裏 裏 裏 裏

一 二 九 二 二 二 五 七 全 一 四 一 〇

業句義 十諦六 詔也 比意 名聲集 此 嘔達洛迦 鬱藍弗 百論疏に 彼死 俱舍利子 統

業句義 十六諦 詔也 此意 名義集 此 嘔達洛迦 鬱藍弗 百論疏に 彼此 俱舍利子 號

全 七 八 九 全 全 全 全 〇 〇 一
裏 裏 裏 裏 裏 裏 裏 裏 裏 裏 表

一 二 九 一 二 五 六 全 九 二 八 二 三

無所有所天 無益說 梯稗 河交廣 〇。斷食して云々 至於山猿野鹿。 當戒日王之大施 やかて 大木の下臥し 道がら 暴乾 修苦行

無所有處天 無盡說 梯稗 河交廣 〇。已下廿字一字下ゲ 至於山猿野鹿。 當戒日王之大施 やがて 大木の下に臥し 道すがら 暴乾 修苦行

一 二 表
一 二 裏
一 三 表
全 全
一 三 裏
一 五 表
一 六 裏
一 七 表
一 七 裏
一 八 表
一 九 表

一 〇
一 五
一
一 二
一 四
一 二
一 五
一
一 七
一 四
一 七
一 七

廣辨
五百羯牛
四吠五論
大千世界品上第四
されは
白佛
廣無量
云妙高山
好高など
佉陀羅山
伊沙陀羅
阿含の經には

廣辨
五百羯羊
四吠陀論
大千世界品第貳
されど
白佛
邊廣無量
云妙高山
好高好光など
一 佉陀羅山
三 伊沙陀羅
阿含の經々は

二 〇 表
二 〇 裏
全
二 一 裏
二 一 表
二 全
二 二 表
全
二 二 裏
二 四 表
全
二 六 表

一 二
一 一
一 〇
一 八
一 四
一 五
一 二
一 八
一 二
一 六
一 九
一 一

畧論
取拾
金山の其
須彌須
有、四種、德
不歌灰
無刺
八切徳水
云、高上作、謂
譚部樹
應言提鞞波
盡せる

畧説
取捨
金山の中
須彌山
有、四種、德
不歌灰
無刺
八功德水
云、高上作、謂
譚部樹
應言提鞞波
盡せり

三七裏
三八表
三九裏
全
四一裏
四三表
四三裏
四四表
四五表
四五裏
全
全

六 一 一 二 九 五 三 二 一 一 六

修槃那般婆山
思ひ給ふ
神鏡
加教
神道
又河
異れと
然らば
之獄
奈何
股肉
奈何

修槃那般婆山
思ひ紛ふ
神境
如教
神通
又河
異れと
然らば
之獄
奈何
段肉
奈何

二八裏
三〇表
三一表
全
三一裏
全
三二裏
三四裏
全
全
全
三七表

六 七 五 一 四 九 四 五 八 九 一 二

小註
書見む閻
大地
事を
知らざり
信用ひて
用ふる
分たり
有難陀優波難陀
二大龍王宮殿
婆竭龍王
名冬王

註解
書見む人
大池
事と
知らざり
信用ひて
用ふる
分たり
有難陀優波難陀
二大龍王宮殿
婆竭龍王
名冬王

四六表 全 四六裏 全 四七表 四九表 四九裏 五一表 五二表 全 全 全

七 九 二 八 一 一 一 三 三 五 全 二

極若 猛火 猛火 火 覆蓋 焰熱 文章 我僧 與餘道 大夫 婦女 大夫 尤病死

極苦 猛火 猛火 火 覆蓋 焰熱 文意 我が僧 與餘道 丈夫 婦女 丈夫 大天 老病死

五二裏 五六表 五六裏 全 五七裏 五八裏 五九表 六〇表

三 九 五 一 二 三 二 四

詞責 修捷 下深 十六地獄 鎖作 第八地獄 加の 十大地獄

詞責 修捷 下深 十大地獄 鐵作 第八泥犁 かの 十大泥犁

附言

生等公務多忙ナリシヨリ本書校合ヲ執事某ニ委托シタリシニ頃日成ルヲ告グルニ及ビテ始メテ閲覽スルニ二號活字ニスベキ處ヲモ四號活字ニ爲シ低頭スベキヲ平頭ニ爲シ句讀訓點ヲ誤リタル類枚舉ニ違アラズ其ノ他誤植鈔カラズ然レモ既ニ數百部摺立テタリシヲ以テ今ハ已ムヲ得ズ卷尾ニ正誤ヲ出セリ看官幸ニ粗漏ノ罪ヲ恕セヨ

校者等白ス

明治十九年十二月十七日版權免許
全 廿一年八月十一日印刷
全 廿一年八月十六日出版

定價金五拾錢

著述者 故 平 田 篤 胤

東京府士族

發行者 平 田 以 志

小石川區小日向第六
天町十七番地

印刷者 根 岸 高 光

牛込區市谷加賀町
一丁目二十三番地

發賣所 印 行 社

小石川區小日向第六
天町十七番地

同 會 通 雜 誌 社

京橋區三十四番地
目十四番地

15
2
40

